

鹿角市文化財調査資料第110集

特別史跡

大湯環状列石

総括報告書

平成29年 3 月

鹿角市教育委員会



石井柏亭筆「環狀列石」

石井柏亭(1882～1958)

明治 15 年、現在の東京都台東区上野に生まれる。本名は満吉。11 歳の時から柏亭と号して日本美術協会などに出品し、数多くの作品を残している。1938 年に制定された国家総動員法にもとづき総戦力体制が敷かれると有島武二や小磯良平等とともに招集され戦争画を描いた。戦後は日本美術展覧会運営理事等を務め、没後正四位勲二等旭日重光章を受章した。

巻頭の 挿絵「環状列石」は、昭和 17 年 10 月 1 日に遺跡訪問時に描いたものである。

序

大湯環状列石は昭和 6 年に発見されました。発見と同時に地域住民により保護され、昭和 26 年・27 年の文化財保護委員会による学術調査を経て、昭和 31 年に特別史跡に指定されました。

鹿角市では、この貴重な遺跡の性格解明、保存と活用を図るため昭和 53 年に『特別史跡大湯環状列石保存管理計画』を策定し、昭和 59 年度から平成 20 年度に発掘調査を実施、これに合わせて平成 3 年度から指定地の公有化事業を開始いたしました。

平成 10 年度から 27 年度にかけて、国や県の支援を受け史跡環境整備事業を実施し、現在では環状列石の雰囲気を感じ取れるまでになり、憩いの場、学びの場として活用されております。

昭和 59 年度から開始した発掘調査は 25 年間に及び、その成果については、その都度、調査報告書として発行していましたが、縄文文化や環状列石の研究に資するため、平成 16 年度に『特別史跡大湯環状列石(Ⅰ)遺構編』を、同 21 年度に『特別史跡大湯環状列石(Ⅱ)遺物編』を発行しました。本報告書はそれらを総括したもので、『特別史跡大湯環状列石総括報告書』として取りまとめたものであります。

大湯環状列石は「北海道・北東北の縄文遺跡群」の構成資産として、資産を有する道県・市町とともに、ユネスコ世界文化遺産リストへの登録に向けて活動を行っておりますが、そのリスト登録に向けて解決すべき課題の一つとして、構成資産の価値を高める必要があると言われております。本書が縄文文化や遺跡の価値を高め、今後の学術研究に僅かでも貢献できれば幸いに存じます。

最後になりましたが、遺跡の保存・研究・活用にあたりご理解とご協力を賜りました特別史跡大湯環状列石環境整備事業検討委員会の各委員、並びに文化庁文化財部記念物課、秋田県教育委員会、さらに本報告書作成にあたりご指導いただきました総括報告書作成指導委員に対し、心から厚く感謝を申し上げます。

平成 29 年 3 月 24 日

鹿角市教育委員会

教育長 畠 山 義 孝

例 言

1. 本報告書は、特別史跡大湯環状列石総括報告書である。これまでに平成 16 年度に『本報告書Ⅰ』として遺構編を、平成 21 年度に『本報告書Ⅱ』として遺物編を発行してきたが、本報告書は総括的なものである。

なお、当教育委員会がこれまでに公表したものと見解が異なる場合は、本報告書の記述内容が優先するものとする。

2. 本報告書は、昭和 59 年度～平成 20 年度に実施し未収録であった調査成果、平成 16 年度から実施した大湯環状列石関連遺跡の調査成果をまとめたほか、新たに実施した放射性炭素年代測定、再調査を実施した石材調査等の成果を収録している。

また、昭和 21 年に甲野勇(後援 朝日新聞社)、同 26 年・27 年に文化財保護委員会が調査した出土遺物が本市に移管されたことから、それらも収録した。

3. 本報告書の執筆は生涯学習課文化財班主任(再任用)藤井安正があたり、それをもとに同課主事赤坂朋美、工藤海と協議を行い原稿修正・加筆した。

また、原稿執筆にあたり熊谷常正、阿部昭典、文化庁、秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室より指導を受けた。

4. 用語については、これまで発行してきた報告書に使用したものを踏襲した。

5. 本報告書に収載した実測図、写真図版、表の作成、遺物の整理については赤坂朋美、工藤海、黒澤健明(平成 27 年 3 月退職)が行なった。

6. 本報告書に使用した地形図は、建設省国土地理院発行の「毛馬内・花輪」を使用した。

7. 発掘調査、環境整備事業並びに本報告書の作成にあたって下記の方々のご指導・ご助言をいただいた。記して感謝の意を表します。(敬称略・所属略)

- ・特別史跡大湯環状列石環境整備事業検討委員

小林達雄、富樫泰時、沢田正昭、熊谷常正、安村二郎、
牛川喜幸、阿部義平、藤本英夫、大里勝蔵

- ・総括報告書作成指導委員

熊谷常正、阿部昭典

- ・行政指導

文化庁 文化財部記念物課

岡本東三、河原純之、松村恵司、加藤允彦、西田健彦、
安原啓示、岡村道雄、田中哲雄、本中 眞、平澤 毅、
水之江和同

秋田県教育庁文化課・生涯学習課文化財保護室

富樫泰時、熊谷太郎、武藤祐浩、吉川耕太郎、磯村 亨、
新海和広、加藤 竜

- ・調査員

成田典彦、鎌田健一、三ヶ田俊明、山谷昌久、佐藤 樹、谷地 薫

8. 中表紙の挿絵は『大湯町環状列石』に収載された石井柏亭の「環状列石」を転載した。

9. 本報告書では、昭和 26 年・27 年に文化財保護委員会が実施した調査を「国営調査」または「国営発掘」と表記しているところもある。

10. 第Ⅳ章 自然科学分析は下記の団体、研究者に依頼した。

放射性炭素年代及び炭素・窒素安定同位体分析	株式会社 加速器分析研究所
遺跡を構成する石材とその起源	藤本幸雄 (秋田地学教育学会)
黒曜石の産地同定	パリノ・サーヴェイ株式会社

11. 本報告書発行時の事業主体・事務局は下記のとおりである(平成 28 年度)。

事業主体	鹿角市教育委員会
	教育長 畠山義孝
事務局	鹿角市教育委員会生涯学習課
	生涯学習課 課長 花ノ木正彦
	同 文化財班長 井上 真
	同 文化財班主任 藤井安正(平成 28 年度再任用)
	同 主事 赤坂朋美
	主事 工藤 海

12. 大湯環状列石の発掘調査に携わった担当者は秋元信夫(平成 24 年 3 月退職)、藤井安正、花海義人、三浦貴子(平成 24 年 3 月退職)である。

13. 本文中では下記の記号を使用した。

記 号	名 称	記 号	名 称	記 号	名 称
S B	掘立柱建物跡	S T	竪穴遺構	S X(S)	環状配石遺構、方形配石遺構、配石遺構、配石列、立石遺構、集石遺構
S I	竪穴住居跡	S X(f)	焼土遺構		
S K	土坑	S X(O)	石囲炉		
S K(F)	フラスコ状土坑	S X(U)	埋設土器遺構		
S K(T)	Tピット	Pit	柱穴状ピット		

本文目次

序	8 縄文時代の遺構と遺物・・・・・・・・・・62 (第21次～25次調査)
例言	(1) 遺構 2-(3) 配石遺構 2-(5) 配石列 7 焼土遺構 8-(2) 土坑
本文目次	(2) 遺物 ① 縄文土器 ② 石器 ③ 土製品 ④ 石製品
図版目次	9 昭和21年、昭和26年 ・27年調査の出土遺物・・・82 ① 縄文土器 ② 石器 ③ 土製品 ④ 石製品
表目次	10 平安時代の遺構と遺物・・・・・・・・・・92 (1)遺構 ① 竪穴住居跡 ② 掘立柱建物跡 ③ 土坑 ④ 焼土遺構 ⑤ 古墳 ⑥ 溝状遺構
写真目次	(2) 遺物 ① 土師器・須恵器 ② 石器 ③ 鉄製品 ④ 土製品
第Ⅰ章 鹿角市の自然環境と歴史	11 江戸時代の遺構・・・・・・・・・・106 (1) 遺構 ① 道路跡(巡検使道)
1 鹿角市の環境・・・・・・・・・・1 (1) 鹿角市の位置と自然環境 (2) 鹿角市の歴史 (3) 市内の縄文遺跡	第Ⅳ章 自然科学分析 1 大湯環状列石における放射性炭素年代 および炭素・窒素安定同位体分析・・・109 2 遺跡を構成する石材とその起源・・・130
第Ⅱ章 大湯環状列石関連遺跡調査について	
1 調査の目的・・・・・・・・・・26 2 調査の方法・・・・・・・・・・26 3 調査の成果・・・・・・・・・・26 4 調査のまとめ・・・・・・・・・・30	
第Ⅲ章 特別史跡大湯環状列石について	
1 大湯環状列石の位置と立地・・・・・・・・32 2 遺跡の発見と調査の歴史・・・・・・・・34 (1) 環状石籬と環状列石 (2) 大湯環状列石発掘史 (3) 研究の足取り 3 遺跡の保存と史跡指定・・・・・・・・45 4 指定地の公有化・・・・・・・・・・47 5 遺跡の活用・・・・・・・・・・47 6 環境整備事業・・・・・・・・・・48 7 報告書の記載について・・・・・・・・51 (1) 地区の設定 (2) 検出遺構の分類 (3) 遺跡の層序 (4) 遺構の記載について	

3	黒曜石の産地同定・・・・・・・・・・	147
4	大湯環状列石周辺の古環境・・・・・・・・	153
5	大湯環状列石周辺遺跡出土の植物遺体 について・・・・・・・・・・	156

大湯環状列石関係文献目録・・・・・・・・	340
写真・・・・・・・・・・	345
報告書抄録	
奥付	

第V章 分析と考察

1	縄文時代の遺物と遺構・・・・・・・・	159
	(1)遺物	
	① 縄文土器	
	② 石器	
	③ 土製品	
	④ 石製品	
	(2) 遺構	
	① 配石遺構	
	② 環状列石	
	③ 環状配石遺構	
	④ 掘立柱建物跡	
	⑤ 竪穴住居跡	
	⑥ 竪穴遺構	
	⑦ 土坑	
	⑧ フラスコ状土坑	
	⑨ 石囲炉	
	⑩ 埋設土器炉	
2	平安時代の遺物と遺構・・・・・・・・	328
	(1) 遺物	
	(2) 遺構	
	① 竪穴住居跡	
	② 掘立柱建物跡	
	③ 土坑	
	④ 溝状遺構	
	⑤ 古墳	
3	近世の遺構・・・・・・・・	331
	(1) 遺構	

第VI章 総括

1	遺跡の全容・・・・・・・・	333
2	遺構の変遷・・・・・・・・	337
3	周辺遺跡からみる大湯環状列石 の位置付け・・・・・・・・	338
4	大湯環状列石とは・・・・・・・・	338

図 版 目 次

<第Ⅰ章>

- 第 1 図 大湯環状列石の位置
第 2 図 上花輪地区出土の擦文土器
第 3 図 鹿角市の主な遺跡
第 4 図 市内遺跡分布(縄文早期)
第 5 図 市内遺跡分布(縄文前期)
第 6 図 市内遺跡分布(縄文中期)
第 7 図 市内遺跡分布(縄文後期)
第 8 図 市内遺跡分布(縄文晩期)
第 9 図 物見坂Ⅲ遺跡の竪穴住居跡実測図
と出土遺物
第 10 図 清水向遺跡の竪穴住居跡と出土遺物
第 11 図 天戸森遺跡遺構配置図
第 12 図 天戸森遺跡配石遺構配置図
第 13 図 天戸森遺跡出土土器(1)
第 14 図 天戸森遺跡出土土器(2)
第 15 図 天戸森遺跡出土土器(3)
第 16 図 黒森山麓竪穴群遺跡遺構配置図
第 17 図 高屋館跡(環状列石)
第 18 図 高屋館跡遺構外出土土器
第 19 図 居熊井遺跡遺構配置図、
竪穴住居跡、捨て場出土土器
第 20 図 小坂環状列石と第3号ピット出土土器
第 21 図 赤坂 A 遺跡竪穴住居跡実測図と
出土土器
第 22 図 赤坂 B 遺跡竪穴住居跡と
遺構内出土土器
第 23 図 玉内遺跡遺構配置図と日時計状組石

<第Ⅱ章>

- 第 24 図 大湯環状列石関連遺跡の位置
第 25 図 下内野Ⅱ遺跡遺構配置図
と第 1 号竪穴住居跡出土土器
第 26 図 小黒森山遺跡の竪穴住居跡
と第 1 号竪穴住居跡出土土器
第 27 図 下内野Ⅲ遺跡遺構配置図と
遺構外出土土器

<第Ⅲ章>

- 第 28 図 大正 3 年作成の地形図
第 29 図 調査区設定図
第 30 図 調査区位置図

- 第 31 図 地区呼称図
第 32 図 中通台地の基本堆積図
第 33 図 調査区の基本層序(1)
第 34 図 調査区の基本層序(2)
第 35 図 万座環状列石内の土層図
第 36 図 配石遺構形態分類図
第 37 図 A1 区～A4 区配石遺構配置図
第 38 図 A4 区配石遺構位置図
第 39 図 A4 区・A6 区配石遺構実測図(1)
第 40 図 A4 区・A6 区配石遺構実測図(2)
第 41 図 A1 区～A3 区配石遺構配置図
第 42 図 H1 区配石遺構配置図
第 43 図 H1 区配石遺構・配石列実測図
第 44 図 G1 区・A4 区・A5 区出土土器
第 45 図 A6 区・A7 区出土土器
第 46 図 H1 区・H2 区出土土器
第 47 図 G1 区～H2 区出土石器
第 48 図 G1 区・A4 区出土土製品・石製品
第 49 図 昭和 21 年、26 年・27 年の調査地区
第 50 図 昭和 21 年調査区実測図
第 51 図 昭和 26 年・27 年調査区位置図
第 52 図 昭和 26 年・27 年調査区実測図
第 53 図 昭和 26 年・27 年調査出土石器
第 54 図 昭和 21 年・26 年
・27 年調査出土土器(1)
第 55 図 昭和 21 年・26 年
・27 年調査出土土器(2)
第 56 図 昭和 21 年・26 年・27 年調査
出土石器・土製品・石製品
第 57 図 平安時代の遺構(北側地区遺構配置図)
第 58 図 竪穴住居跡実測図(1)
第 59 図 竪穴住居跡実測図(2)
第 60 図 D1 区竪穴住居跡出土遺物
第 61 図 F1 区竪穴住居跡出土遺物
第 62 図 F4 区竪穴住居跡出土遺物
第 63 図 A1 区掘立柱建物跡実測図
第 64 図 F4 区土坑実測図と出土遺物
第 65 図 古墳実測図
第 66 図 道路跡実測図
第 67 図 道路跡想定ルート

第 68 図 明治後半の遺跡周辺切絵図

<第IV章>

第 69 図 暦年較正年代グラフ

(マルチプロット図 cal BP 参考)

第 70 図 暦年較正年代グラフ

(マルチプロット図 cal BC/AD 参考)

第 71 図 炭素・窒素安定同位体比グラフ(参考)

第 72 図 放射性炭素年代分析試料(1)

第 73 図 放射性炭素年代分析試料(2)

第 74 図 放射性炭素年代分析試料(3)

第 75 図 放射性炭素年代分析試料(4)

第 76 図 放射性炭素年代分析試料(5)

第 77 図 放射性炭素年代分析試料(6)

第 78 図 放射性炭素年代分析試料(7)

第 79 図 地質図

第 80 図 円磨度の印象図

第 81 図 河床礫と環状列石石材

の岩石種類別組成

第 82 図 石英緑ひん岩の河床礫と石材

の最大径 L L/M、M/S、円磨度 R

第 83 図 安山岩の河床礫と最大径 L

L/M、M/S、円磨度 R

第 84 図 帯磁率とその頻度分布

第 85 図 諸助山石英閃緑ひん岩岩体の節理

第 86 図 黒曜石産地推定(1)

第 87 図 黒曜石産地推定(2)

第 88 図 採取層序と採取番号

<第V章>

第 89 図 後期土器の編年(1)

第 90 図 後期土器の編年(2)

第 91 図 III群 3 類土器の分布状況

第 92 図 III群 4 類・5 類土器の分布状況

第 93 図 III群 6 類土器の分布状況

第 94 図 III群土器の分布状況

第 95 図 出土土器(1)

第 96 図 出土土器(2)

第 97 図 出土土器(3)

第 98 図 出土土器(4)

第 99 図 出土土器(5)

第 100 図 出土土器(6)

第 101 図 出土土器(7)

第 102 図 出土土器(8)

第 103 図 出土土器(9)

第 104 図 出土土器(10)

第 105 図 出土土器(11)

第 106 図 出土土器(12)

第 107 図 出土土器(13)

第 108 図 出土土器(14)

第 109 図 出土土器(15)

第 110 図 出土土器(16)

第 111 図 出土土器(17)

第 112 図 出土土器(18)

第 113 図 出土土器(19)

第 114 図 出土土器(20)

第 115 図 出土土器(21)

第 116 図 出土土器(22)

第 117 図 出土土器(23)

第 118 図 出土土器(24)

第 119 図 出土土器(25)

第 120 図 出土土器(26)

第 121 図 出土土器(27)

第 122 図 出土土器(28)

第 123 図 出土土器(29)

第 124 図 出土土器(30)

第 125 図 出土土器(31)

第 126 図 出土土器(32)

第 127 図 出土土器(33)

第 128 図 出土土器(34)

第 129 図 出土土器(35)

第 130 図 石鏃分布図

第 131 図 石錐分布図

第 132 図 石匙分布図

第 133 図 石鏝分布図

第 134 図 搔器分布図

第 135 図 三脚石器分布図

第 136 図 打製石斧分布図

第 137 図 磨製石斧分布図

第 138 図 石錘分布図

第 139 図 敲石分布図

第 140 図 凹石分布図

第 141 図 磨石分布図

第 142 図 石皿分布図

第 143 図 砥石分布図

第 144 図 出土石器(1)

第 145 図	出土石器(2)	第 187 図	球状石製品分布図
第 146 図	出土石器(3)	第 188 図	碗状石製品分布図
第 147 図	出土石器(4)	第 189 図	棒状石製品分布図
第 148 図	出土石器(5)	第 190 図	出土石製品(1)
第 149 図	出土石器(6)	第 191 図	出土石製品(2)
第 150 図	出土石器(7)	第 192 図	出土石製品(3)
第 151 図	出土石器(8)	第 193 図	出土石製品(4)
第 152 図	出土石器(9)	第 194 図	出土石製品(5)
第 153 図	出土石器(10)	第 195 図	出土石製品(6)
第 154 図	土偶分布図	第 196 図	出土石製品(7)
第 155 図	耳栓分布図	第 197 図	出土石製品(8)
第 156 図	有孔土製品分布図	第 198 図	出土石製品(9)
第 157 図	鐔形土製品分布図	第 199 図	出土石製品(10)
第 158 図	キノコ形土製品分布図	第 200 図	国営調査の配石遺構分類模式図
第 159 図	土錘分布図	第 201 図	配石遺構分類模式図(新)
第 160 図	土器片利用土製品分布図	第 202 図	石材採取想定地
第 161 図	ミニチュア土器分布図	第 203 図	野中堂環状列石実測図
第 162 図	出土土製品(1)	第 204 図	配石遺構配置図(野中堂)
第 163 図	出土土製品(2)	第 205 図	万座環状列石実測図
第 164 図	出土土製品(3)	第 206 図	配石遺構配置図(万座)
第 165 図	出土土製品(4)	第 207 図	野中堂環状列石の石列
第 166 図	出土土製品(5)	第 208 図	万座環状列石の石列(内帯)
第 167 図	出土土製品(6)	第 209 図	環状配石遺構分布図
第 168 図	出土土製品(7)	第 210 図	環状配石遺構実測図
第 169 図	出土土製品(8)	第 211 図	掘立柱建物跡柱配置 模式図(I 類～V 類)
第 170 図	出土土製品(9)	第 212 図	万座環状列石周辺の 掘立柱建物跡配置図
第 171 図	出土土製品(10)	第 213 図	野中堂環状列石周辺の 掘立柱建物跡配置図
第 172 図	出土土製品(11)	第 214 図	万座北側地区の 掘立柱建物跡配置図
第 173 図	出土土製品(12)	第 215 図	掘立柱建物跡柱配置 模式図(VI 類～IX 類)
第 174 図	出土土製品(13)	第 216 図	万座環状列石に隣接する VI 類～IX 類建物跡配置(1)
第 175 図	出土土製品(14)	第 217 図	万座環状列石に隣接する VI 類～IX 類建物跡配置(2)
第 176 図	出土土製品(15)	第 218 図	D1 区 SB201 実測図
第 177 図	出土土製品(16)	第 219 図	野中堂環状列石に隣接する VI 類から IX 類建物跡配置
第 178 図	出土土製品(17)	第 220 図	竪穴住居跡位置図
第 179 図	出土土製品(18)		
第 180 図	出土土製品(19)		
第 181 図	石刀・石棒分布図		
第 182 図	石冠分布図		
第 183 図	有孔石製品分布図		
第 184 図	軽石石製品分布図		
第 185 図	円盤状石製品分布図		
第 186 図	三角形岩版分布図		

- 第 221 図 竪穴住居跡実測図
第 222 図 竪穴住居跡出土土器
第 223 図 D1 区第 201 号竪穴遺構と出土遺物
第 224 図 竪穴遺構位置図
第 225 図 万座環状列石周辺の土坑分布図
第 226 図 野中堂環状列石周辺の土坑分布図
第 227 図 万座環状列石周辺の
 フラスコ状土坑分布図
第 228 図 野中堂環状列石周辺の
 フラスコ状土坑分布図
第 229 図 フラスコ状土坑出土土器
 (万座地区 1)
第 230 図 フラスコ状土坑出土土器
 (万座地区 2)
第 231 図 フラスコ状土坑出土土器
 (野中堂地区)
第 232 図 フラスコ状土坑出土土器
 (万座北側地区)
第 233 図 フラスコ状土坑出土土器
 (万座北側地区)
第 234 図 フラスコ状土坑出土土器
 (万座西側地区)
第 235 図 石囲炉位置図
第 236 図 埋設土器炉位置図
第 237 図 浅井が記録した古墳図面
第 238 図 奥州南部領図十郡

表 目 次

<第Ⅱ章>

第 1 表 大湯環状列石周辺遺跡調査概要

<第Ⅲ章>

第 2 表 大湯環状列石の歴史

第 3 表 発掘調査の成果

第 4 表 史跡指定・追加指定の経緯

第 5 表 環境整備の概要

第 6 表 地区設定と主な検出遺構

第 7 表 第 21 次～25 次調査検出遺構数

第 8 表 第 1 次～25 次調査検出遺構数

第 9 表 各地区の遺構総数

第 10 表 A4 区・A6 区配石遺構観察表

第 11 表 H1 区配石遺構観察表

第 12 表 配石遺構形態分類新旧表

<第Ⅳ章>

第 13 表 放射性炭素年代測定結果

($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

第 14 表 放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 未補正
値、暦年校正用 ^{14}C 年代、校正年代 cal
BP)

第 15 表 放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 未補正
値、暦年校正用 ^{14}C 年代、校正年代 cal
BP/AD)

第 16 表 炭素・窒素安定同位体比及び含有量

第 17 表 環状列石を構成する岩石の種類(個数)

第 18 表 環状列石を構成する岩石の種類別%

第 19 表 安山岩(an)の最大径の分布%

第 20 表 石英閃緑ひん岩(qdb)
の最大径の分布%

第 21 表 分析試料一覧

第 22 表 黒曜石産地の判別群名称

第 23 表 黒曜石分析結果(元素 X 線強度)

第 24 表 黒曜石分析結果(判別指標値
および産地推定)

第 25 表 検出された花粉化石の個体数

第 26 表 植物遺体の出土量

<第Ⅴ章>

第 27 表 石器組成の比較

第 28 表 土製品組成の比較

第 29 表 石製品組成の比較

第 30 表 万座環状列石配石遺構形態新旧対照表

第 31 表 野中堂環状列石配石遺構形態
新旧対照表

第 32 表 地区毎の配石遺構形態割合

第 33 表 環状列石、環状・方形配石遺構
岩質割合

<第Ⅵ章>

第 34 表 遺跡の変遷

写 真 図 版

<第Ⅰ章>

- PL 1 大日堂舞楽
- PL 2 三光塚古墳
- PL 3 花輪祭の屋台行事

<第Ⅲ章>

- PL 4 昭和 26 年・27 年当時の遺跡
- PL 5 環境整備された大湯環状列石
- PL 6 先住民中通遺跡の石碑
- PL 7 昭和 21 年当時の調査風景
- PL 8 特別史跡の碑
- PL 9 大湯環状列石埋蔵文化財収蔵庫

<第Ⅳ章>

- PL10 花粉化石の写真
- PL11 植物遺体

<第Ⅴ章>

- PL12 万座環状列石南側の配石遺構群
(昭和 30 年頃慶應義塾大学より移管)
- PL13 在郷坂一里塚

<写真>

- PL14 神代文化研究所・
昭和 21 年調査風景(1)
- PL15 昭和 21 年調査風景(2)・
国営調査担当者
- PL16 昭和 26 年・27 年国営調査(1)
- PL17 昭和 26 年・27 年国営調査(2)
- PL18 昭和 26 年・27 年国営調査(3)
- PL19 昭和 26 年・27 年国営調査(4)
- PL20 昭和 26 年・27 年国営調査(5)
- PL21 昭和 30 年～40 年代の遺跡の様子(1)
- PL22 昭和 30 年～40 年代の遺跡の様子(2)・
昭和 21 年・国営調査出土土器(1)
- PL23 昭和 21 年・国営調査出土土器(2)、
環境整備された遺跡(1)
- PL24 環境整備された遺跡(2)、代表的な
出土遺物、大湯ストーンサークル館
- PL25 環状列石内の石列

第Ⅰ章 鹿角市の自然環境と歴史

1 鹿角市の環境

(1) 鹿角市の位置と自然環境

鹿角市(第1図)は、秋田県北東部にあって青森県・岩手県と接し、北東北三県のほぼ中心に位置する。行政面積は約707km²、南北61km、東西27kmの細長い市域である。盆地を囲む山なみは垣根のようにも見えることから「青い垣山」と称され、北は十和田湖、南は八幡平へと続いていく。これらの山々には豊富な鉱物資源が眠り、尾去沢鉱山や白根金山等が操業していた。

鹿角盆地は、奥羽山脈東側裾野にあり、標高はおおよそ100～350メートル、まわりの山々で最も高い南の皮投岳が1,122m、続く五ノ宮嶽が1,115m、それらの奥にそびえる八幡平が1,614mである。一方、北は十和田山地に続き、十和田山は1,053mである。今は十和田湖を抱く十和田火山はおおよそ三万年前から噴火を繰り返し、火砕流を噴出し鹿角の大地の表層を成している。今から千百年前の噴火は、住みついていた人々に記憶され「八郎太郎伝説」の元になったと言われている。また、盆地の骨格の一部を成す緑色凝灰岩(グリーントフ)は、火山活動により大小60を超える鉱山と、大湯・湯瀬・八幡平等の温泉郷を作り出した。

しかし、時間の流れの中で大きな地殻変動は鳴りをひそめ、地震等に対し鹿角は比較的強い地域となっている。平成23年3月の東北大震災では、震源地近くの太平洋岸で震度7や6強を記録したが、鹿角は震度4にとどまり、直接的な被害は軽微であった。

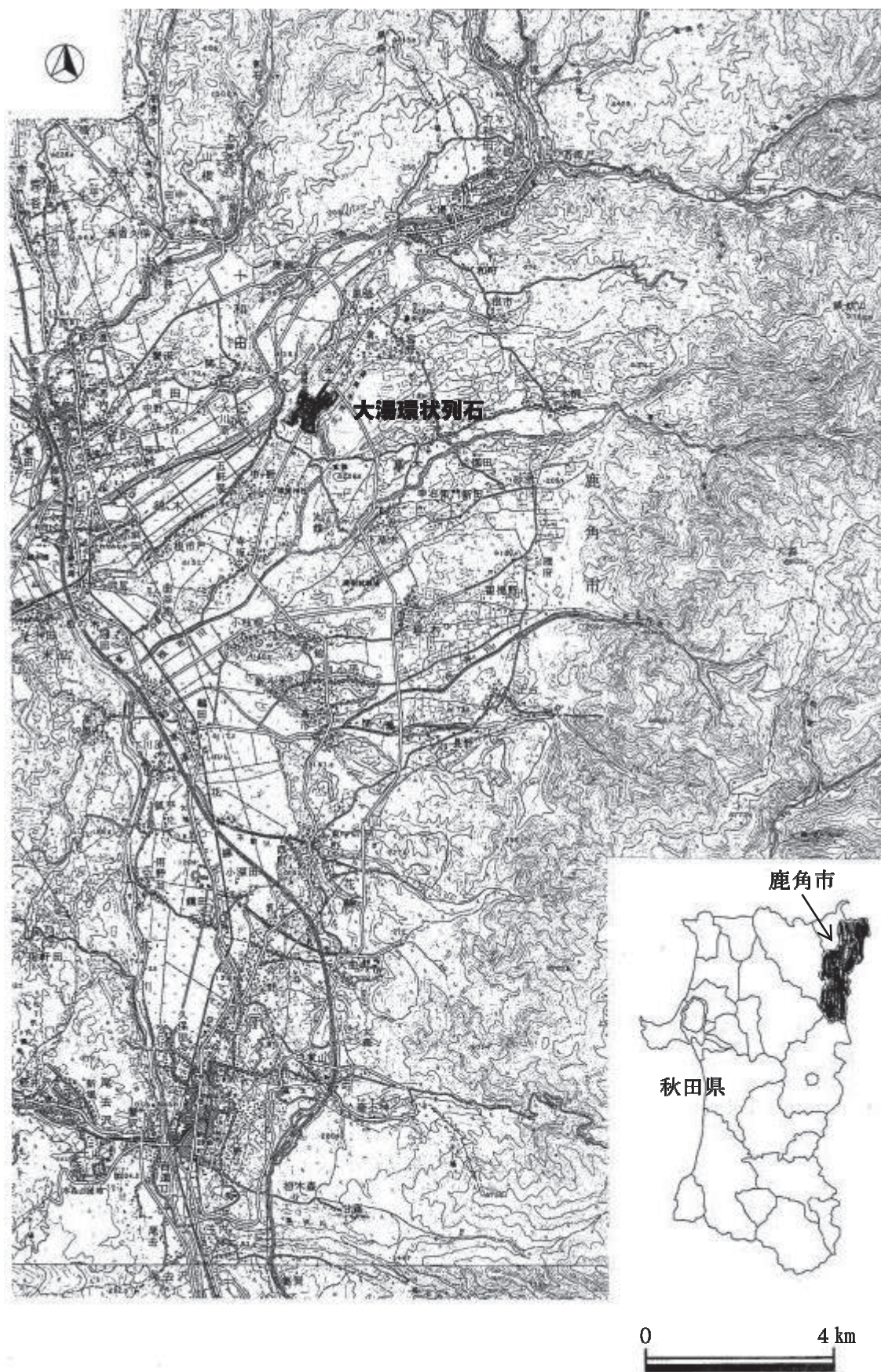
盆地中心部には米代川をはじめとする河川が南北に走り、水の恵みをもたらしている。現在でも山々の間から大きな川に流れ入る「沢」地形が多い。鹿角の開闢伝説には、皮投岳から盆地を見た猟師が鹿の角のように川が走っているのを見て「鹿角」と名付けたという説もある。

米代川をはじめとする大湯川、小坂川、熊沢川、夜明島川など大小の河川は、現在では治水工事によりゆるやかに流れているが、大正3年(昭和8年修正、第28図)に参謀本部が発行した毛馬内地区の地形図では、遺跡台地眼下を流れる大湯川は大きく蛇行していることが看取される。大湯環状列石ののる「中港台地」の地形は現状と変化はなく、現在、県道となっている道路がすでに台地中央を縦断し、環状列石を分断している。

市内を流れる大小の河川は有史以前から氾濫を繰り返し、台地を削って四層の河岸段丘(高市・鳥越・申ヶ野・毛馬内面)を残した。現在、最も低い第一面(標高100～150m)が生活の中心となっているが、縄文から平安時代の遺跡が発見されるのは主に鳥越・申ヶ野面(150～200m)で、大湯環状列石もこの台地上に所在する。

鹿角の気候は、典型的な山間盆地の内陸的気候で、昼夜の寒暖の差は大きく、風はやや弱い。年間の平均気温は10℃前後、雨量は積雪も加味すると比較的多い。冬は西風が強く吹いて多くの雪をもたらす降雪期間も長いが、北陸地方や秋田県南の豪雪地帯よりは少ない。また、台風が直撃されることも少なく、その損害は少ない。

鹿角の植物は低地性から高地性まで多くの種類があり、日本海側の種類が多いが太平洋側のものも見られ、非常に豊富である。動物の種類についても多く、特に獣や鳥については古くから狩猟で暮らしをたてる人々(マタギ)がいたように、様々な形での恵みをもたらしている。



第1図 大湯環状列石の位置

（２）鹿角市の歴史

鹿角は、石川啄木によって「青垣山を繞らせる天さかる鹿角の國」と詠まれ、自然環境に恵まれ、これを背景に営まれた歴史が各地に刻まれている。

縄文時代については後述することから、この項では古代からの鹿角の歴史を記載する。

<古代>

奈良時代、律令政治の東国浸透とともに中央の文化が陸奥・鹿角まで入り込んでくる。八幡平小豆沢地区に鎮座する大日靈貴神社は、養老 2(718)年の再建と言われ、そこに伝わる「大日堂舞樂」は尊像開眼供養の際、都から下向した楽人によって伝えられたものと言われている。毎年正月 2 日に養老例祭が執り行われ、能衆はこれにあわせ精進潔斎し、能衆自身が神に化身し奉納する。奉納される田楽舞は、国内では最古の形を残していると言われ、昭和 51(1976)年に国重要無形民俗文化財に指定、平成 21(2001)年にユネスコ無形文化遺産に記載された。



PL1 大日堂舞樂

「鹿角」は古来「上津野」と呼ばれ、初めて歴史書に登場するのは『日本三大実録』である。元慶 2 (878) 年 3 月 15 日、帰順した蝦夷が秋田城やその周辺の民家を襲撃したことが発端となった「元慶の乱」に関する記載には、秋田城平定の命を受け、陸奥鎮守将軍となった小野春風が遠征途中に上津野に入り俘囚を説得し、秋田城に入っている。また、同年 7 月 10 日の条には「秋田城下賦地」の記載には、火内(大館市比内周辺)、野代(能代)、河北(旧琴丘町・山本町周辺)等とともに夷賦の村として書き記されている。この時の道筋は「陸奥路」と呼ばれ、それ以降は「鹿角(南部)街道」として整備され、交通の重要路線となっていった。

奈良時代の遺跡・地名は盆地北側に分布する。物見坂Ⅲ遺跡では竪穴住居とともに、市内では初めて土師器高坏が出土し、その遺跡周辺には蝦夷に係る地名として蝦夷森・戦森等が点在する。

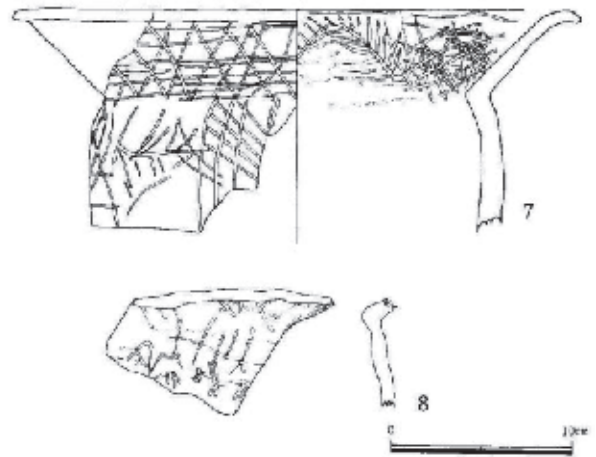
平安時代に入ると遺跡(集落)が多くなり、全市的に分布するようになる。奈良末期から平安初頭には「円墳(終末期古墳・PL2)」が造られる。枯草坂古墳の発見は古く明治 34(1901)年に勾玉・ガラス玉・切子玉が出土している。その資料は、現在東京国立博物館に収蔵されている。この古墳の後方台地に所在する物見坂Ⅰ遺跡は、農道建設に伴い平成 16(2004)年・17(2005)年に鹿角市教育委員会が発掘調査を行い、円墳四基と二振の蕨手刀が発見された。



PL2 三光塚古墳

平安時代中頃に東北北部を襲う大きな自然災害が発生した。それが十和田火山の噴火である。京都延暦寺巧徳院の僧皇円が書き記したとされる『扶桑略記』の延喜 15(915)年 7 月の条に「七月五日甲子、卯時、日无暉、其貌似月、時人奇之。十三日、出羽國言上雨灰高二寸諸郷農桑枯損之由」と噴火の様子が詳細に記録されている。ユリウス暦に直すと延喜 15 年 7 月 5 日は西暦

915 年 8 月 18 日にあたる。この火山灰は大湯環状列石周辺では約 20cm～30cm の厚さで堆積しているが、十和田火山に近い鹿角市十和田田代平付近では 2m 余りである。この時に発生したシラス洪水(毛馬内火砕流)は、大館市や北秋田市の家屋(片貝家ノ下遺跡・胡桃館遺跡)を飲み込み、日本海側の能代市付近まで達している。この自然災害は米代川流域に居住した人々に大きな衝撃と与えるものであったことから、その様子が「八郎太郎伝説」として語り継がれている。



第 2 図 上花輪地区出土の擦文土器

平安時代後半には、河川に堆積した砂鉄と山地の豊富な木材(炭)を利用し、鹿角でも製

鉄が行われる。米代川左岸に位置する堪忍沢遺跡では 13 基のタタラ製鉄跡と工房跡とされる竪穴住居跡が発見され、周辺地域への農具・武具の供給地であったと考えられている。

また、花輪字上花輪地内から 10 世紀頃の土師器とともに擦文土器(第 2 図)が出土していることから、北海道との関りを推察することができる。

<中世・近世>

鎌倉時代になると鹿角も中央の支配を直接受けるようになる。奥州合戦後、功績のあった関東武士団は恩賞として鹿角や比内の地頭職として任命され、その家臣がこの土地を支配するようになる。彼らは武蔵国や下総国を出自とした秋元・奈良・阿保(安保)・成田であり「鹿角四氏」と呼ばれる。その支配形態は「一村一館」で、今でも集落の後方には堀割りした「多郭連続式」の館跡が残されている。近世の書である『鹿角由來記』には 42 の館跡(岩手県八幡平市田山区を含む)が記載されているが、平成元年の調査では 65 の館跡が確認された。

戦国時代の動乱も収まり、織豊期になると中世鹿角に構築された堅固な館跡は「館潰し」によってその機能を失い廃絶する運命を辿っていくが、花輪館や柏崎館のように街道の要所にある中世城館には南部盛岡藩の代官所が置かれ、幕末までその機能を失うことなく存続した。

鹿角地方は「田舎なれども鹿角の里は 西も東も金の山(からめ節)」と謳われるほど金や銅を産出する鉱山があった。特に尾去沢鉱山や白根鉱山(のちの小真木鉱山)は、南部盛岡藩の貴重な財源であった。当時の花輪村は尾去沢鉱山への物資補給基地として栄え、花輪代官所の眼下に大規模な町人街が発展した。また、毛馬内村は主要街道である「鹿角街道」・「来満街道」・「濁川街道」が交差する地域であり、しかも秋田藩境に近いことから代官所が置かれた。毛馬内は学問を重んじた地域で秀でた先人が多く輩出している。東洋史学の祖と言われている内藤湖南の生誕地でもある。

尾去沢鉱山から産出・精錬された粗銅は、海路西回り・東回りで大阪へ運ばれ、幕府の貿易決済銅として海外に輸出された。粗銅とともに江戸や上方を往来した大店によって中央の文化や贅沢品、日用雑貨等が花輪にもたらされたものと考えられている。財政の豊かな大店により花輪祭り(通称:花輪ばやし)は支えられ、当初は本屋台・囃子屋台・飾り山が町内を練り歩いたとの記録もある。また、花輪祭り終了後に行われる「花輪の町踊り」は江戸情緒を伝えている

とされている。

大きな財力を背景に、大店が中心となり花輪町部の産土神である幸稲荷神社の祭典を行った。この祭典に係る記事が残された最古のものは、明和2(1765)年の『御銅山御定目帳』で、尾去沢鉦山の運営が南部盛岡藩に移った時のものである。これは当時の鉦山労務者の一年間の休日を定めたもので「(前略)但し 花輪稲荷毛馬内月山と隔年之祭典也(後略)」と記載されている。この資料から花輪稲荷・毛馬内月山の祭典(花輪祭、毛馬内



PL3 花輪祭の屋台行事

祭)は今から 250 年程前にはすでに行われていたことが分かる。花輪稲荷(幸稲荷神社)祭典については記録保存調査が行われ、平成 26(2014)年 3 月に「花輪祭の屋台行事(PL3)」として国重要無形民俗文化財に指定、平成 28(2016)年 12 月にユネスコの無形文化遺産一覧に記載するよう第 11 回政府間委員会が決議した。

慶応三年、徳川慶喜は大政を奉還した。新政府側と旧幕府側の間で京都の鳥羽・伏見において戦(戊辰戦争の発端)があった。秋田藩と盛岡藩の藩境に位置する鹿角は争い場となり、それは大きな影響を及ぼすものであった。市指定有形文化財「田中北嶺筆 戊辰役絵図」には秋田藩大館城の攻防後の戦士帰還の様子が鮮明に描かれている。

<近代>

明治維新に際し、盛岡藩は奥羽越列藩同盟に属し、新政府側となった秋田藩としばしば戦火を交えることになり、維新後の世情から、鹿角は九戸県、八戸県、江刺県を経て明治 5(1873)年に秋田県に編入された。編入の際、鹿角郡は四つに行政区分されたものの、一年後には三つに、同 12(1880)年からは十六ヶ村・二鉦山になって花輪に郡役所が置かれた。さらに同 22(1890)年に市町村制がしかれ、鹿角郡は二町八村となった。政府による殖産興業政策の中で、尾去沢鉦山、小坂鉦山等の鉦石採掘・製錬技術の近代化が図られ、それとともに花輪地区に郡役所が置かれたこともあり、周辺の町村の商業地として、鉦山や中央への物資の供給地・中継地点として発展していった。

鉄道建設の北進は近代化へ進む画期的な出来事であった。明治 24(1891)年、現在の東北本線が青森まで開通、同 38(1905)年に奥羽本線が全面開通した。鹿角でも鉄道建設の要望が強くなっていくが、大館・好摩間、現在の JR 花輪線が開通するのは昭和 11(1936)年まで待たなければならなかった。鉄道の開通は、鹿角の経済・観光・文化の一大躍進を生み出した。これまで尾去沢鉦山・小坂鉦山の保養地的な場所であった湯瀬温泉や大湯温泉がそれまでの姿を一新する発展を遂げ、また、昭和 11 年に国立公園となった十和田湖に先立ち、その前年には十和田湖和井内・毛馬内間に省営バスが通るなど、観光面でも全国に周知されるに至った。

太平洋戦争によって経済・文化など大きな打撃を受けたが、昭和 25(1950)年 6 月に勃発した朝鮮戦争は軍事物資の一つである銅の多量採掘・製錬をもたらした。この当時の様子を知る古老は、昭和 30 年前後が最も花輪地区が繁栄した時ではないかと語っている。

昭和 47(1972)年、旧花輪町・十和田町・尾去沢町・八幡平村が合併し人口 5 万人を超す「鹿角市」が誕生するが、その後大きく変容していく。昭和 53(1978)年には、全国有数の採掘・製

鍊量を誇った尾去沢鉱山が粗銅の価格低迷・採掘単価高騰から閉山へと追い込まれた。さらに、昭和 57 年(1982)の東北新幹線(盛岡・大宮間)開業、昭和 59(1984)年の東北自動車道が青森市まで開通し高速交通時代に突入すると、若者の市外流出による過疎化が一層進んだ。

現在、鹿角市では地場産業の構築、農産物のブランド化や観光による集客と雇用の場の確保を行い、地力の底上げを図っており、平成 28 年 12 月末の人口は 32,199 人である。

(3) 市内の縄文遺跡

鹿角市内には平成元(1989)年の時点において 416 カ所の遺跡が発見された。これらの遺跡は鹿角盆地東側に発達した台地に多く、なかでも大湯黒森山山麓(元大湯スキー場)から花輪東山地区・八幡平インターチェンジにかけての分布密度が高い。

時期区分ごとに分布図(第 4 図～8 図)を掲載した。作成にあたっては平成元年度の遺跡詳細分布調査の成果をもとにしたが、調査の目的を遺跡の有無・範囲、大まかな時代を確認することに中心を置いていたため、遺跡の詳細な時期まで把握していないものもある。

この調査で確認・発見された縄文時代の遺跡は、単独・複合遺跡合わせて 250 遺跡にも及ぶ。全体的な占地を見ると奥羽山脈の裾野に開けた扇状地、大小の河川によって形成された舌状台地、山地斜面低位に形成された平坦地のほか、米代川左岸の低位山地の段丘上に立地している。標高 120m～190m 範囲に集中し、最も標高の高い遺跡は折戸遺跡の 250m である。

市内に所在し、発掘調査された縄文時代の遺跡(第 3 図)を時期ごとに概観する。

<草創期>

八幡平大里地区に所在する飛鳥平遺跡のみである。東北縦貫自動車道の建設に先立って発掘調査され、爪形文土器片 4 点が出土した。遺構は確認されていない。

<早期>

遺跡数は少なく、花輪東山地区並びに中港台地周辺に点在(第 4 図)する。中港台地先端に立地する物見坂Ⅲ遺跡(第 9 図)は、平成 14(2002)年に国道改良工事に伴って秋田県埋蔵文化財センターが、同 16(2004)年に農道改良工事に伴って鹿角市教育委員会が発掘調査を行っている。市教育委員会の調査では貝殻文・貝殻沈線文系の土器とともに、隅丸方形を呈する竪穴住居跡 1 棟を検出した。大湯環状列石北西台地縁周辺からも貝殻文土器破片が出土した。

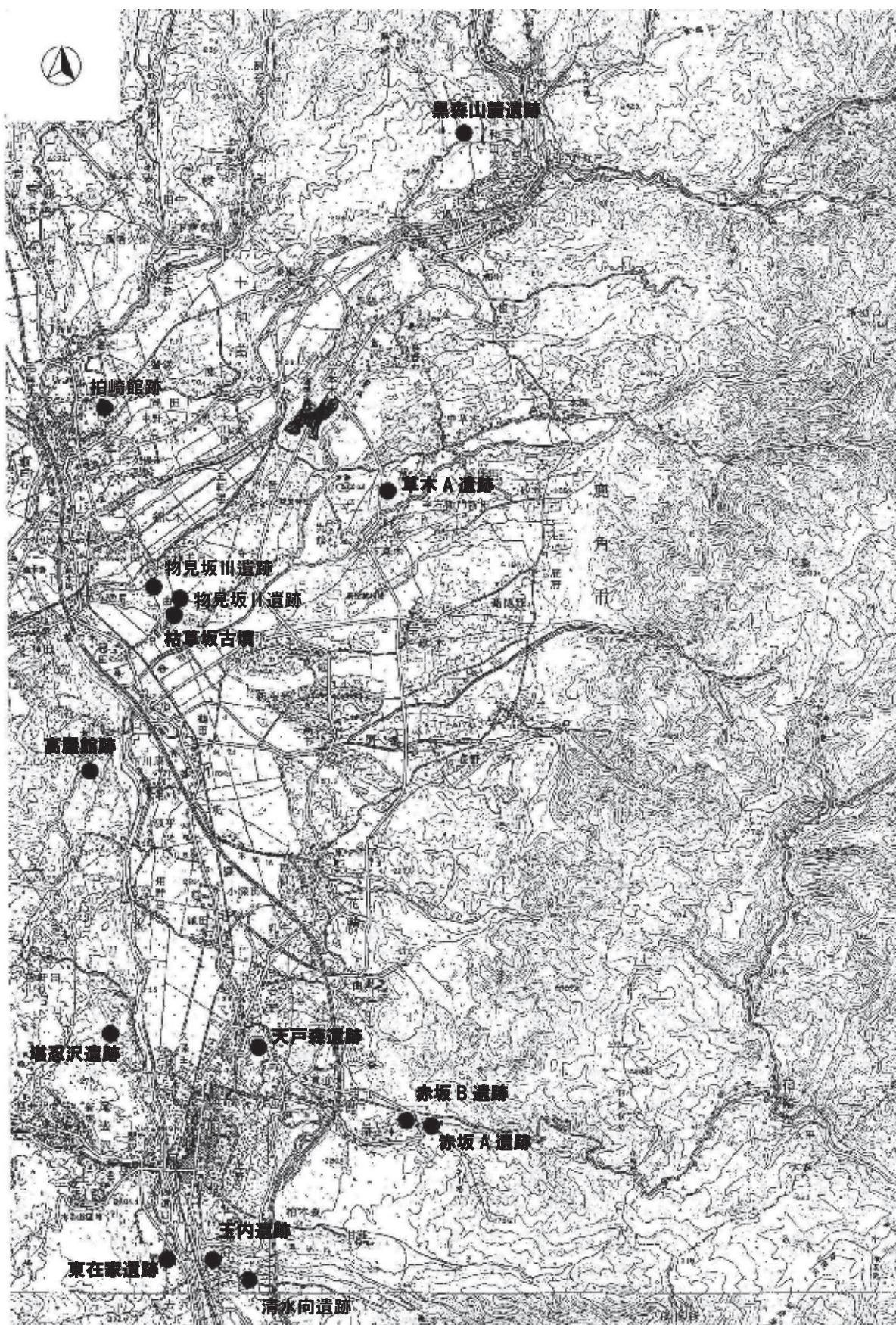
<前期>

小坂川右岸の毛馬内瀬田石地区、米代川右岸の花輪乳牛地区から八幡平小豆沢地区に多く分布(第 5 図)する。特に小豆沢地区の遺跡は急峻な山地を背にするものが多い。

この時期の代表的な遺跡として清水向遺跡(第 10 図)がある。昭和 29(1954)年に武藤鉄城らによって発掘調査され、竪穴住居跡 2 棟が検出された。円筒下層式土器とともに大木系土器が出土したと報告している。そのうちの数点は國學院大學博物館に収蔵・展示されているが、地元に残された土器類は所蔵者宅の火災とともに消失した。

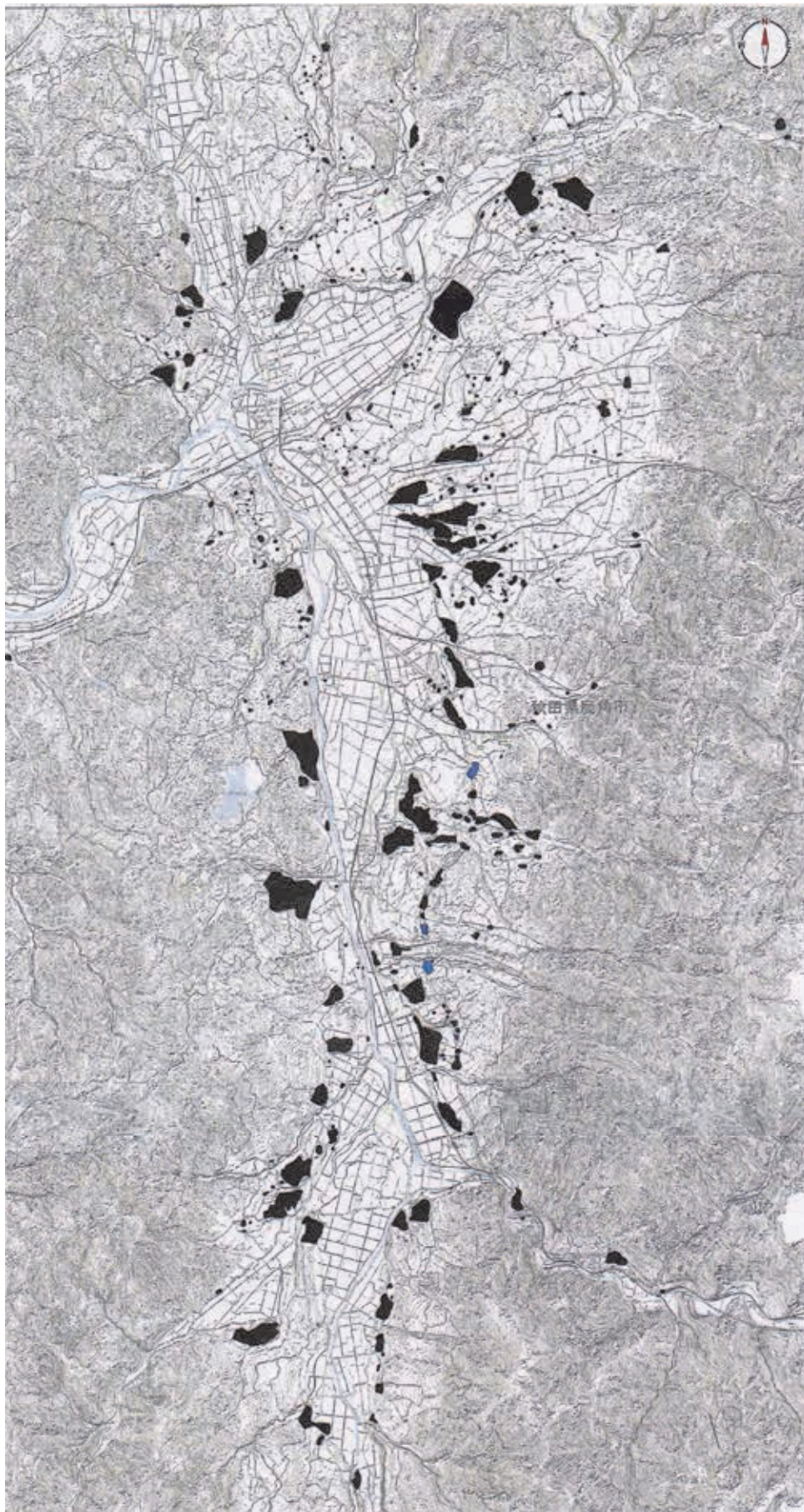
<中期>

この時期に入ると遺跡数が前期と比較して増加する。前期と同様、花輪小平地区から八幡平小豆沢地区に密集するが、八幡平を水源とする熊沢川流域にも遺跡が確認され、その分布範囲(第 6 図)は広がる。



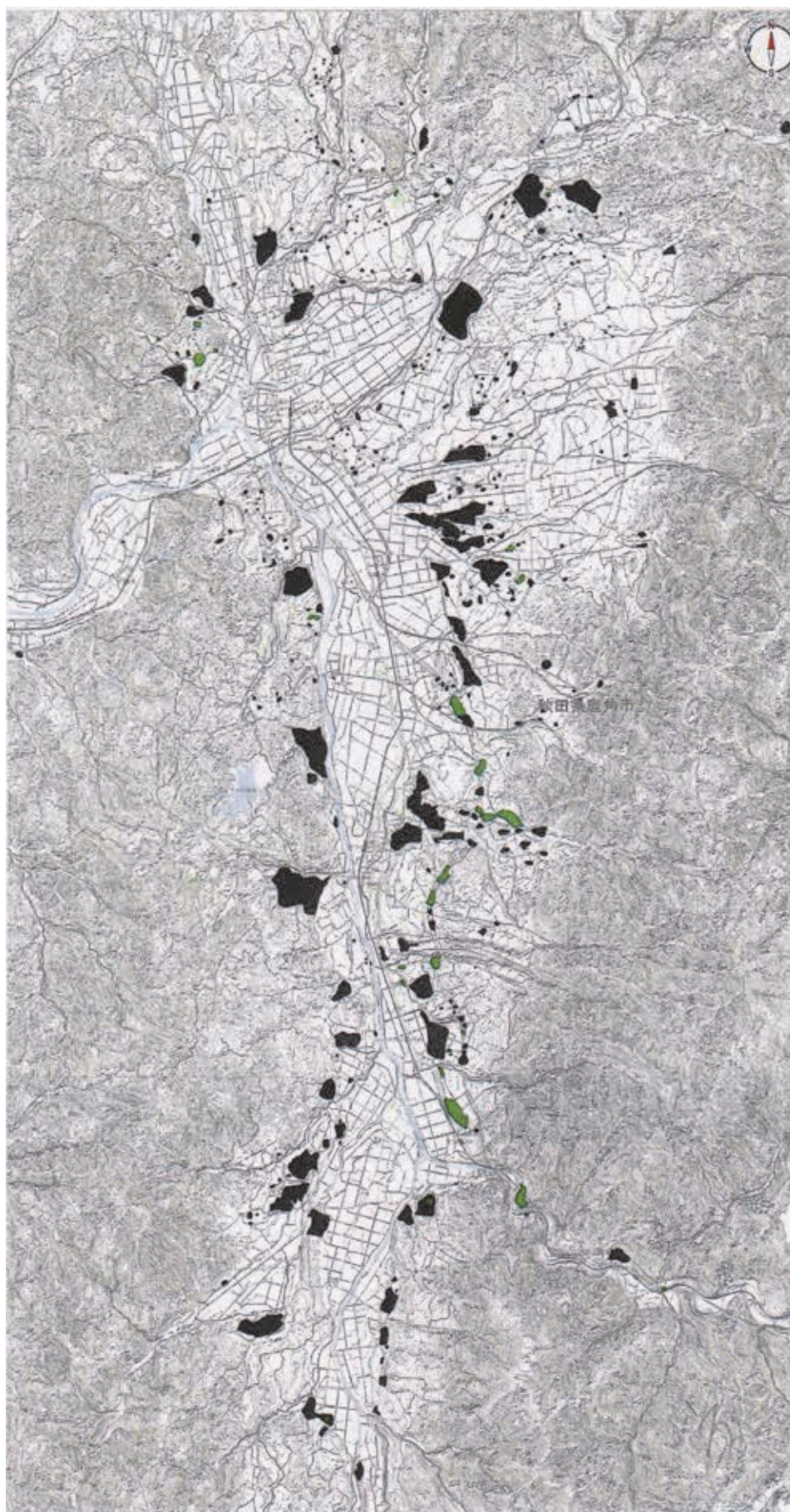
第 3 図 鹿角市の主な遺跡





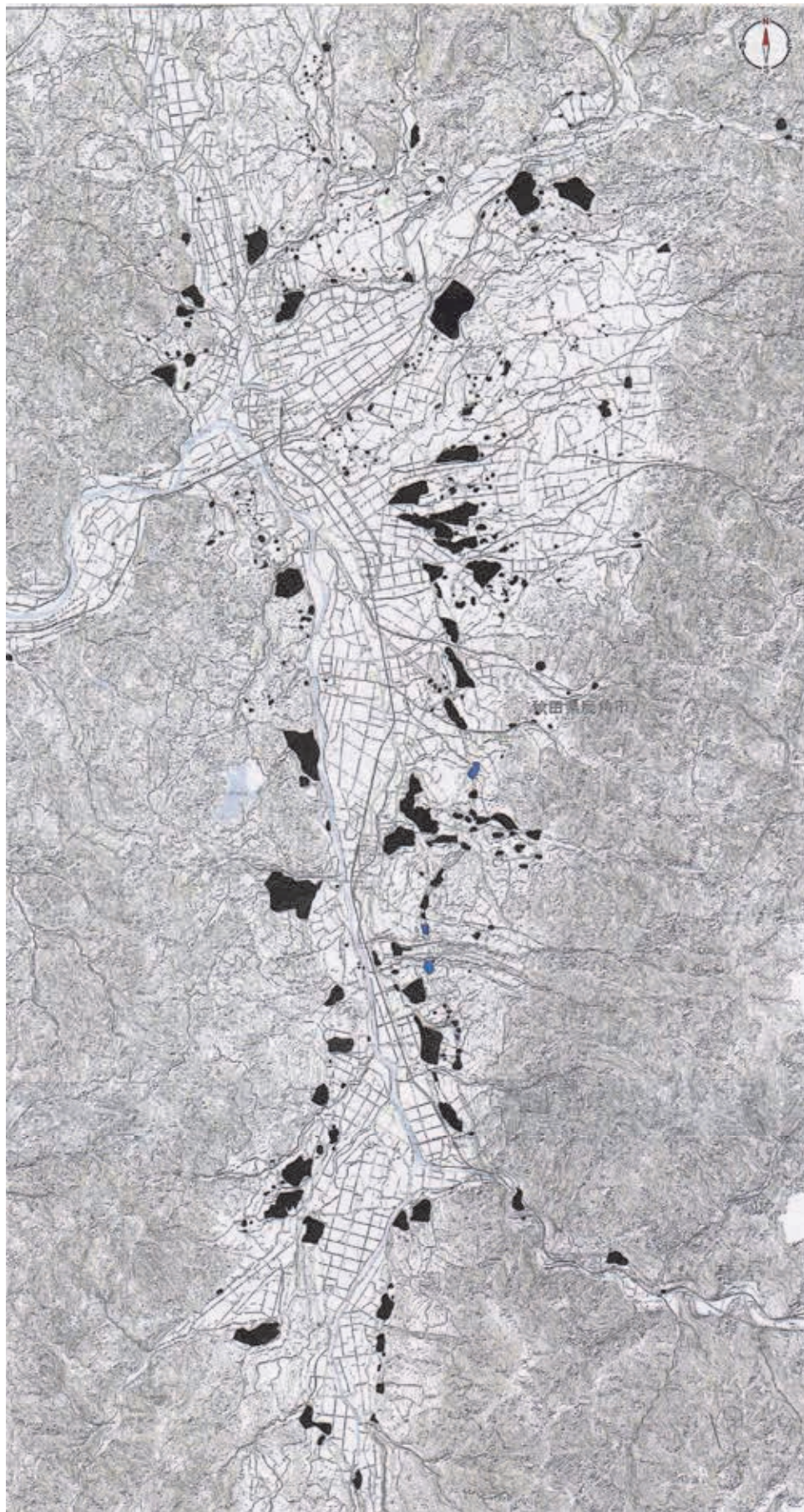
第4図 市内遺跡分布(縄文早期)

縮尺任意



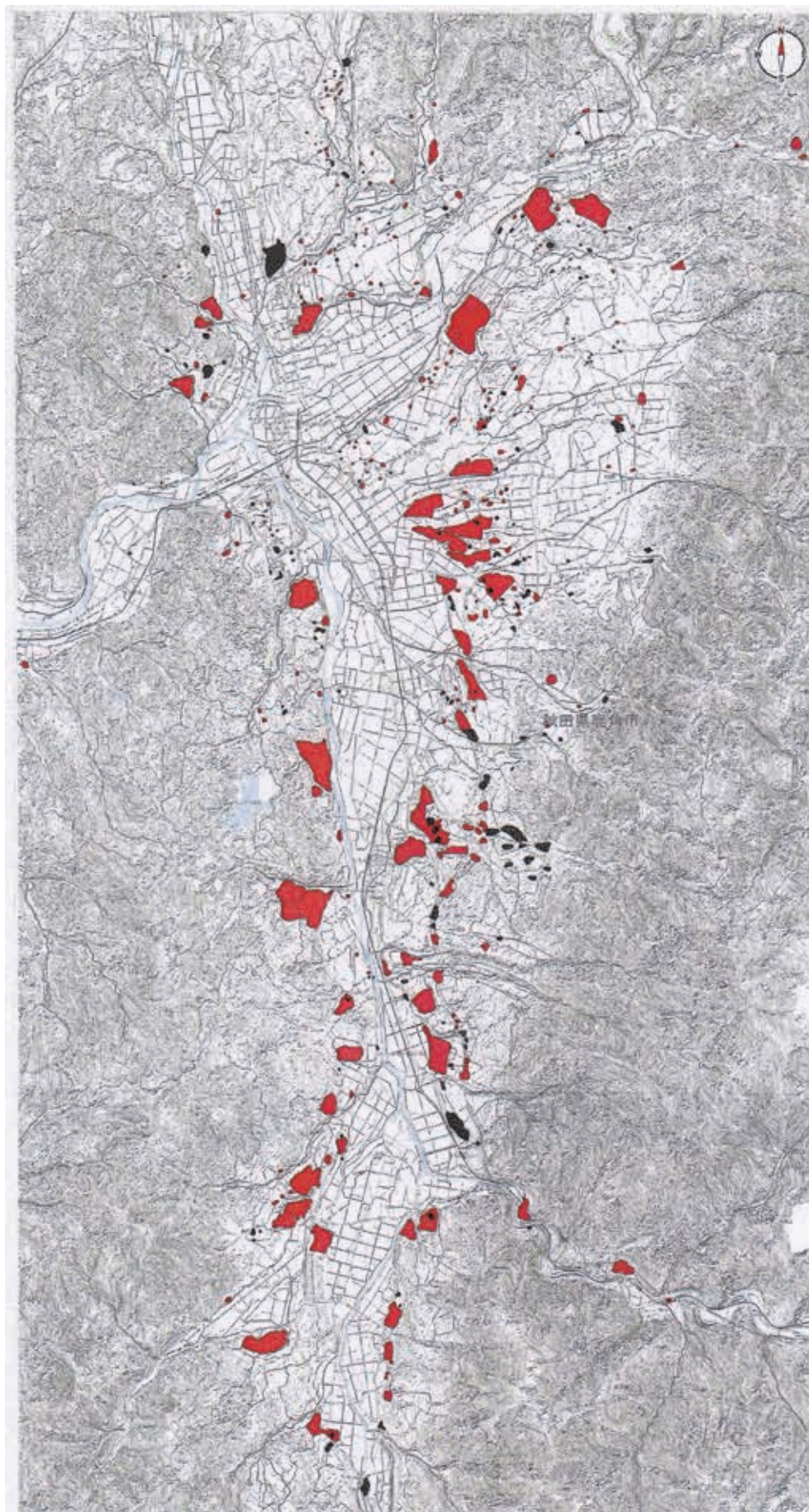
第 5 図 市内遺跡分布(縄文前期)

縮尺任意



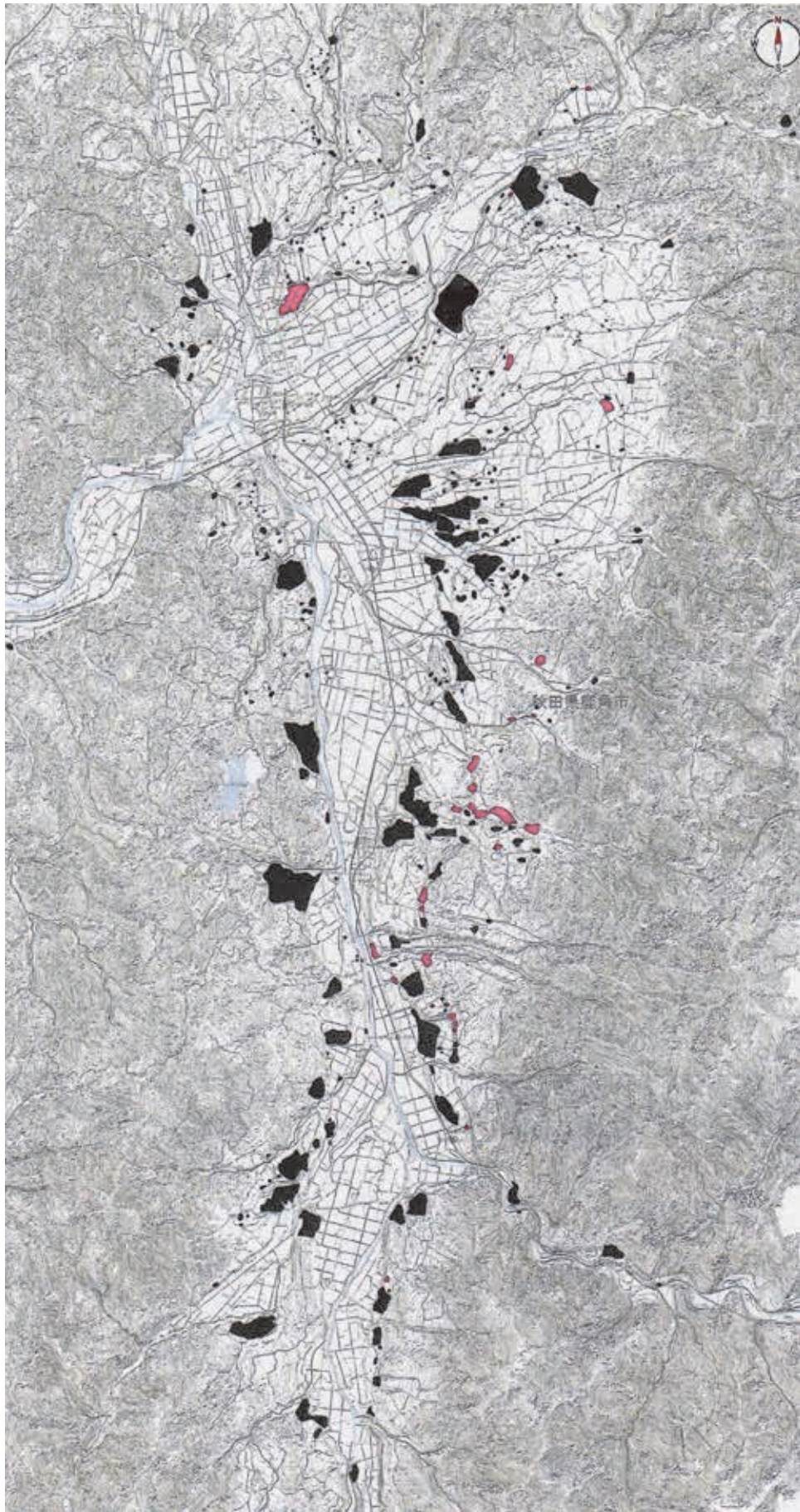
第 6 図 市内遺跡分布(縄文中期)

縮尺任意



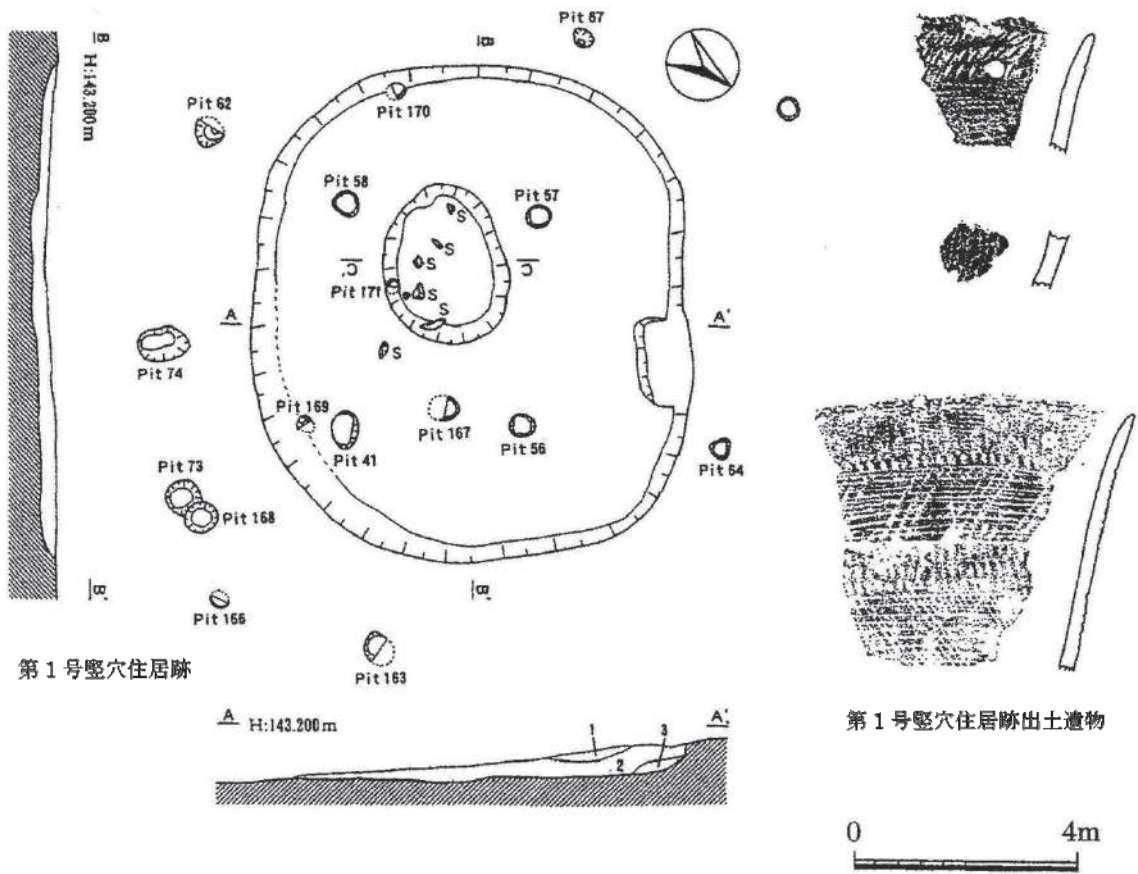
第 7 図 市内遺跡分布(縄文後期)

縮尺任意

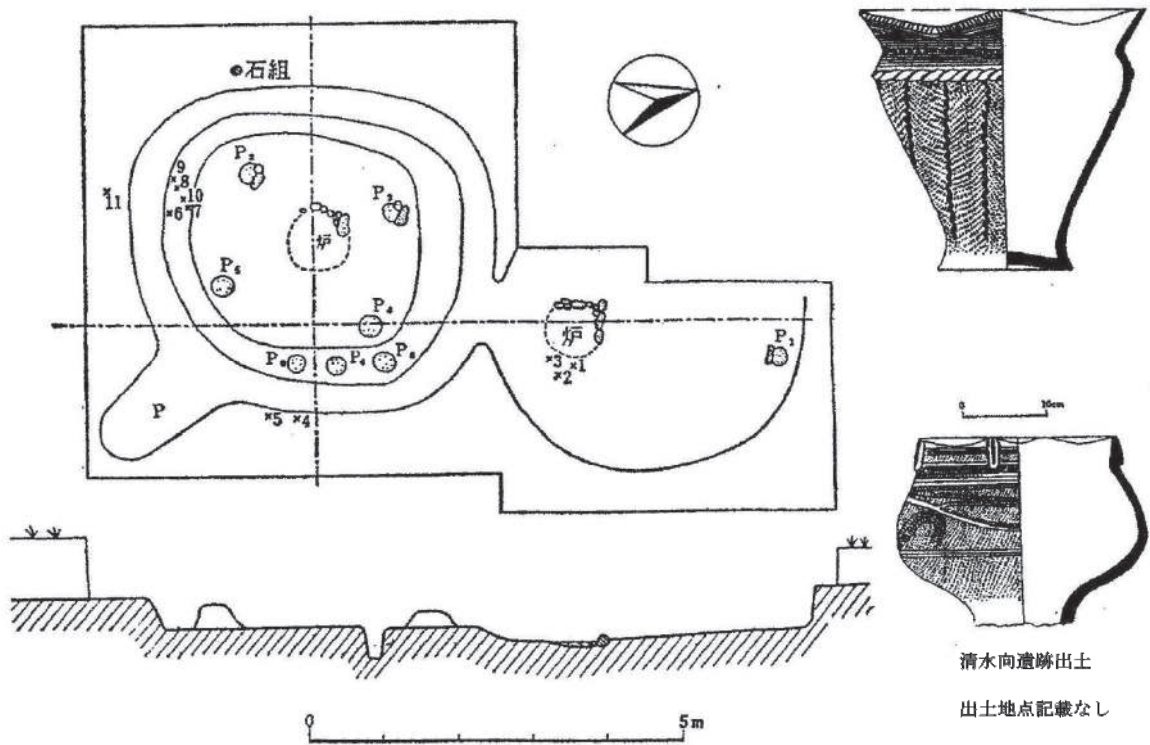


第 8 図 市内遺跡分布(晩期)

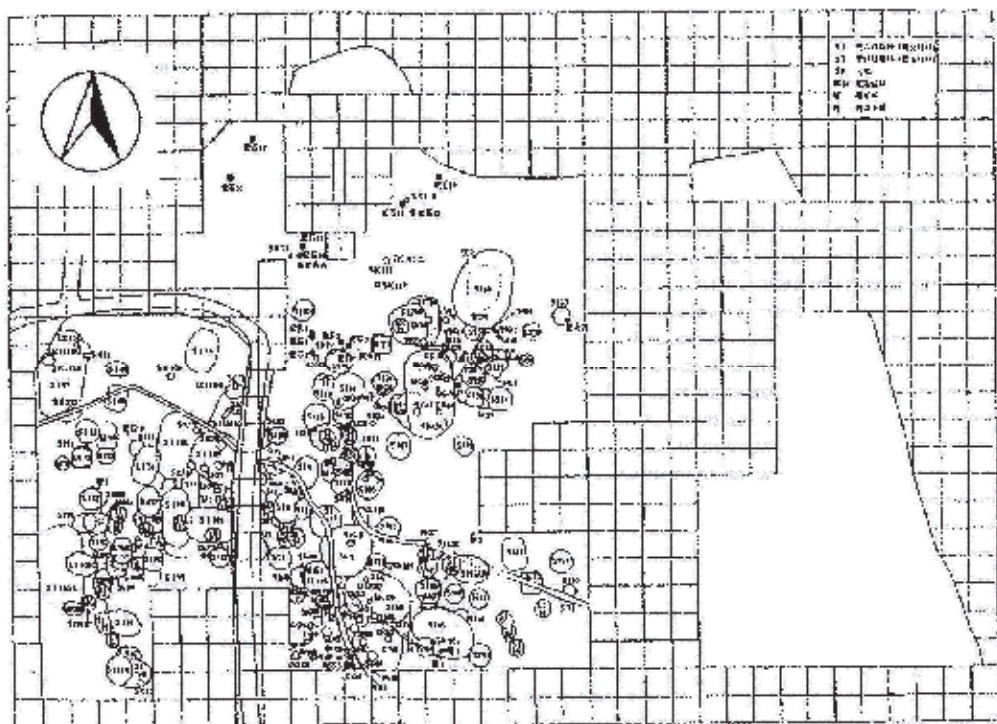
縮尺任意



第9図 物見坂Ⅲ遺跡の堅穴住居跡実測図と出土遺物

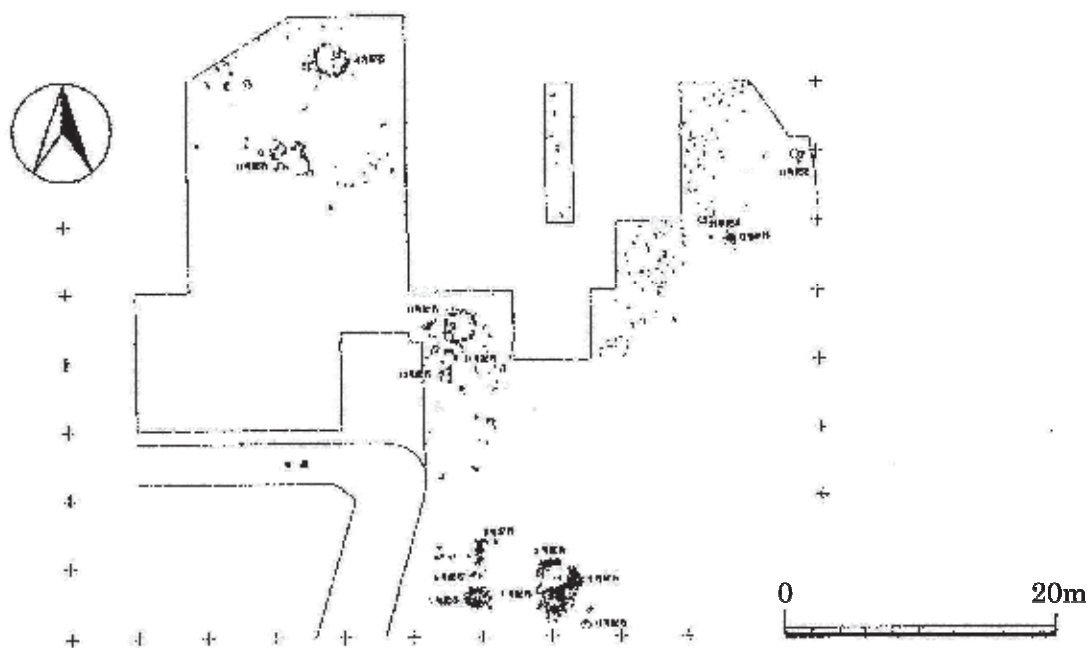


第10図 清水向遺跡の堅穴住居跡と出土遺物(『秋田県の考古学』より)

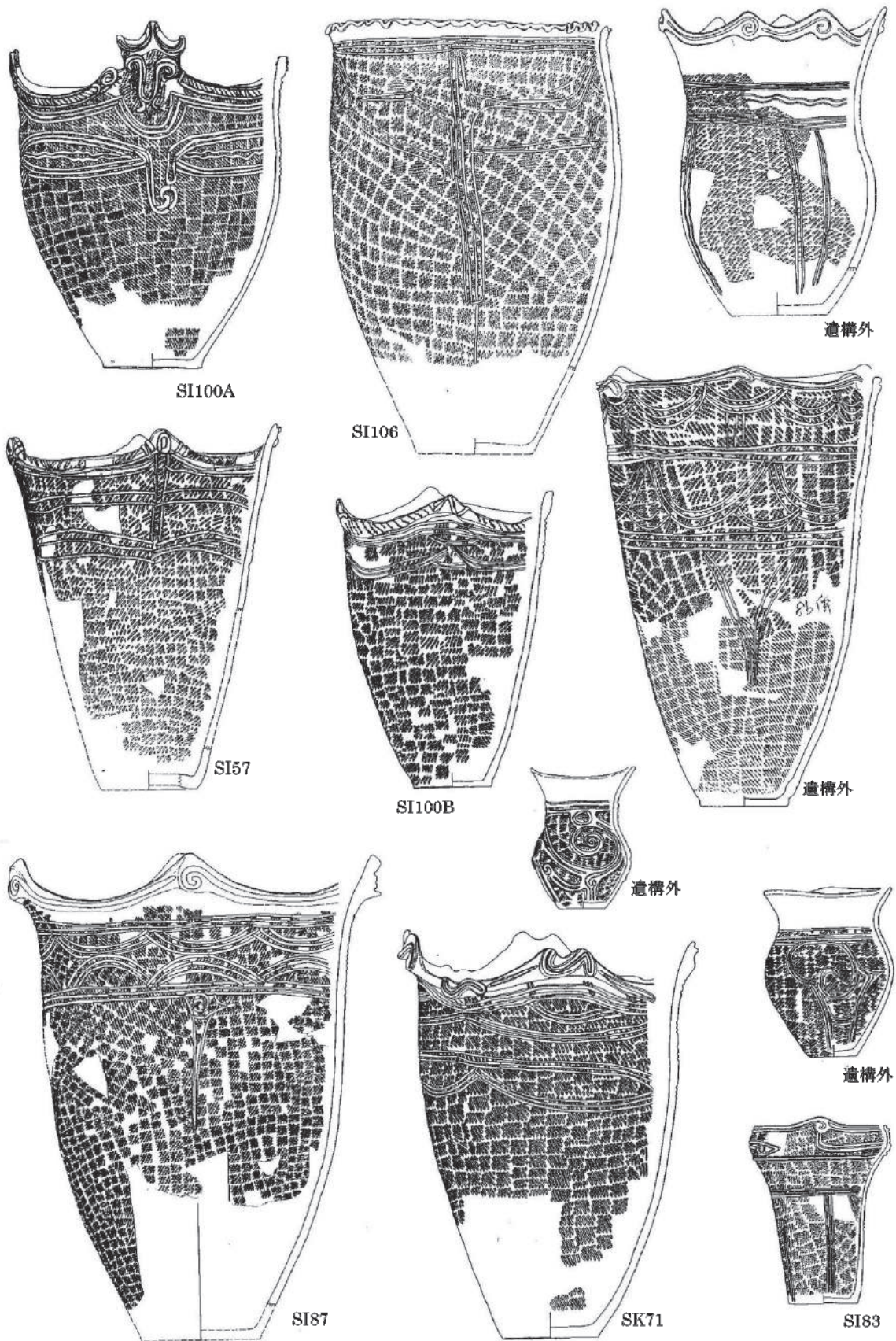


第 11 図 天戸森遺跡遺構配置図

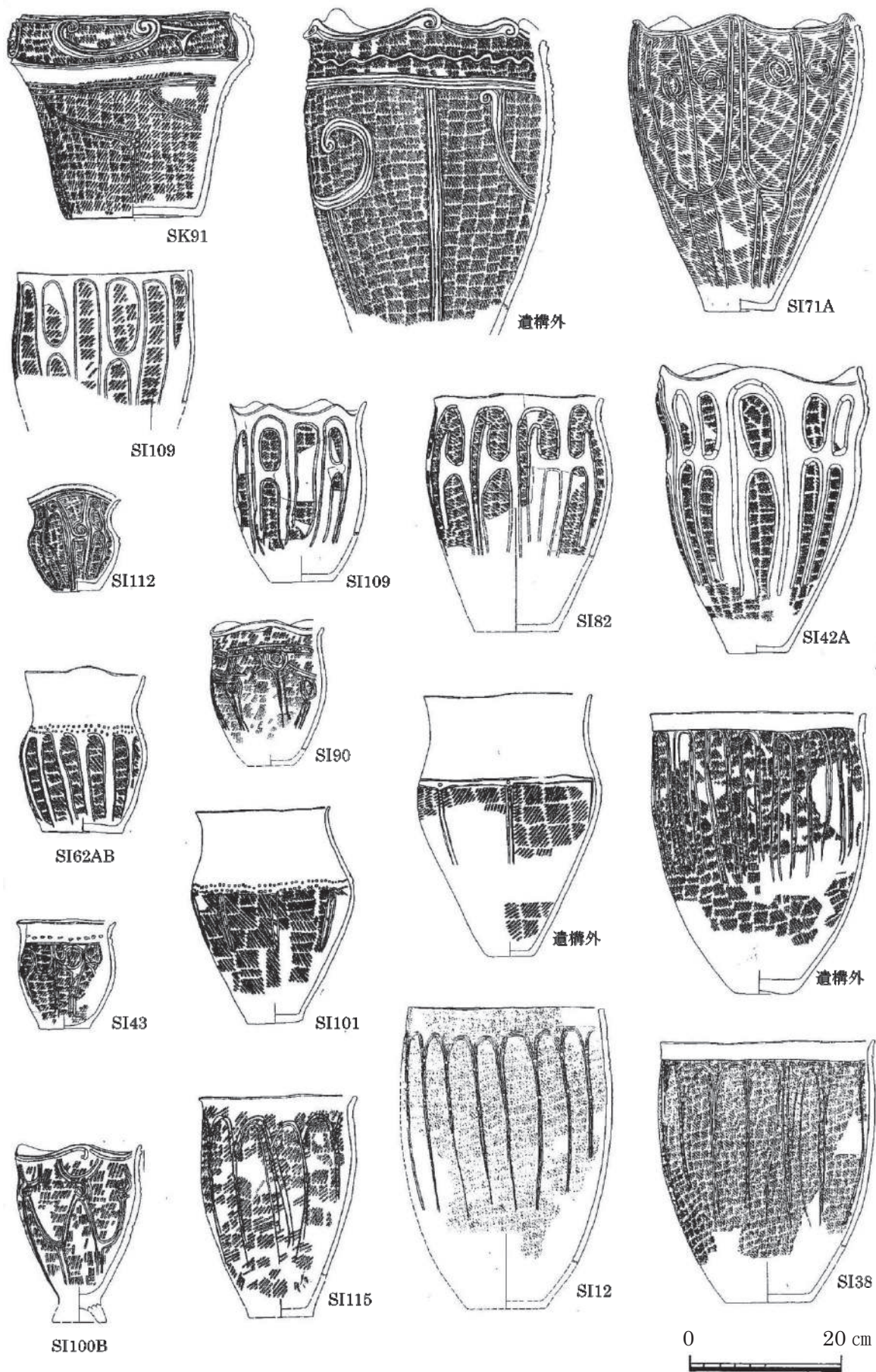
0 40m



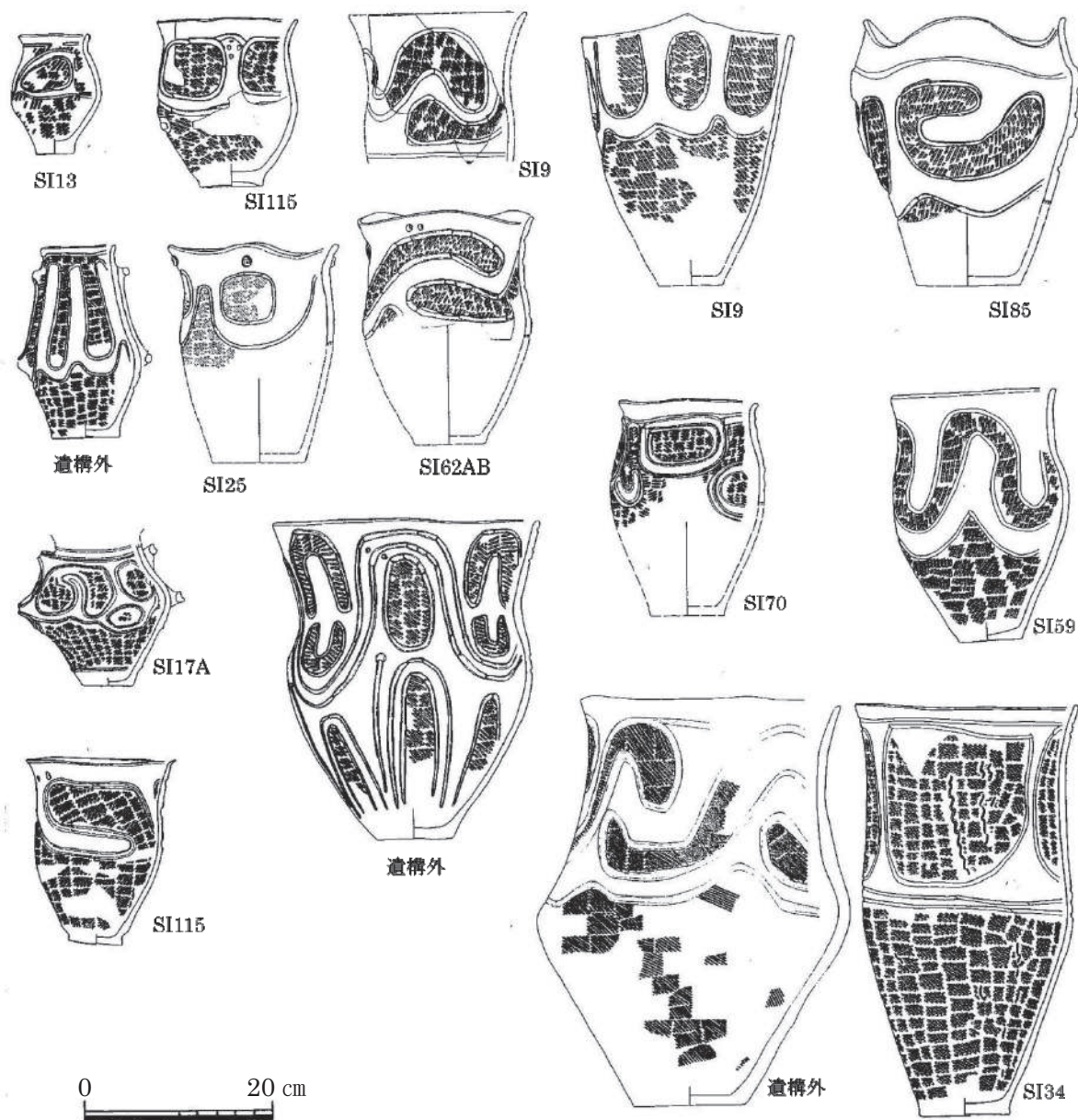
第 12 図 天戸森遺跡配石遺構配置図



第 13 図 天戸森遺跡出土土器(1)



第 14 図 天戸森遺跡出土土器(2)



第 15 図 天戸森遺跡出土土器(3)

花輪地区に所在する天戸森遺跡(第 11 図～15 図)からは、竪穴住居跡 140 棟、土坑 103 基、配石遺構 21 基等とともに多量の土器・石器が出土した。数棟から構成されたムラが幾度も建替えられ、中期中葉から末葉を中心に営まれた遺跡である。また、台地先端には配石遺構が弧状を呈するように配置され、環状列石への発達を感じさせるものである。土器は東北南部の大木式土器、北部の円筒上層式土器のほか大木式の影響を受けた土器が出土し、集落や土器編年の研究上で重要な遺跡となっている。

大湯川右岸段丘の高位段丘にある黒森山麓遺跡群(第 16 図)は、大湯環状列石の北東側 4.5 km の地点に位置し、昭和 45(1970)年に発掘調査が行なわれた。縄文中期末葉の竪穴住居跡 5 棟が検出され、付設された複式炉は当時北限の事例として注目された。住居平面は円形を基調とし、規模は径 5.5～9m である。遺構外からの出土土器には後期の土器も含まれている。この段丘は平坦で面積も広く、小黑森遺跡や下内野Ⅱ遺跡等数多くの遺跡が分布する。



第 16 図 黒森山麓竪穴群遺跡遺構配置図

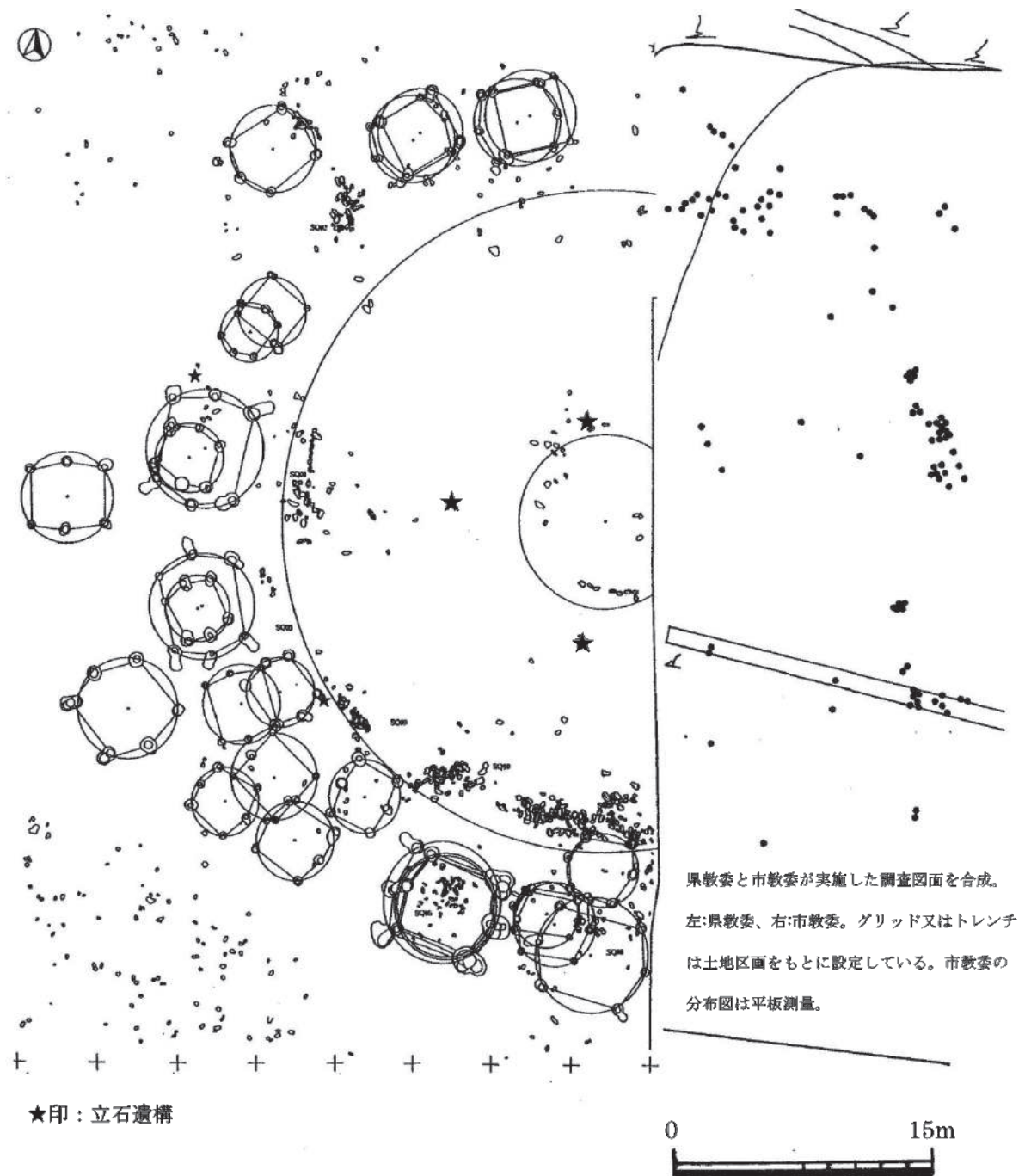
<後期>

前期・中期の遺跡と比べ市内全域(第 7 図)に分布し遺跡数も多くなるが、小規模な遺跡が多くなる。東北地方北部では中期末から後期初頭にかけて大規模集落が崩壊し、小規模な集落が点在することが指摘されているが、この動向を表している。

後期前葉の環状列石が検出された高屋館跡遺跡(第 17 図・18 図)は、大湯環状列石ののる台地とは米代川を挟んで対岸に位置し、直線で約 4 km 離れている。平成元(1989)年に西山農免農道の建設に先立って秋田県埋蔵文化財センターが調査した。山地の裾野に形成された狭い平坦地から径約 34m の環状列石とそれを規則的に取り囲む 26 棟の掘立柱建物跡が検出され、板状土偶や鐸形土製品等が出土した。構築時期は大湯環状列石の造営時期と重複する。

また、大湯環状列石と大湯川を挟んで対峙する黒森山山麓には、環状配石遺構や鐸形土製品が検出・出土した下内野Ⅲ遺跡、狩猟文土器が出土した下内野Ⅱ遺跡があり、段丘の至るところには大湯環状列石の主要構築材と同一の石英閃緑玢岩が山積みとなっている。

湯瀬地区の居熊井遺跡(第 19 図)からは同時期の竪穴住居跡 1 棟と、小規模な遺物廃棄域(捨て場)が確認された。



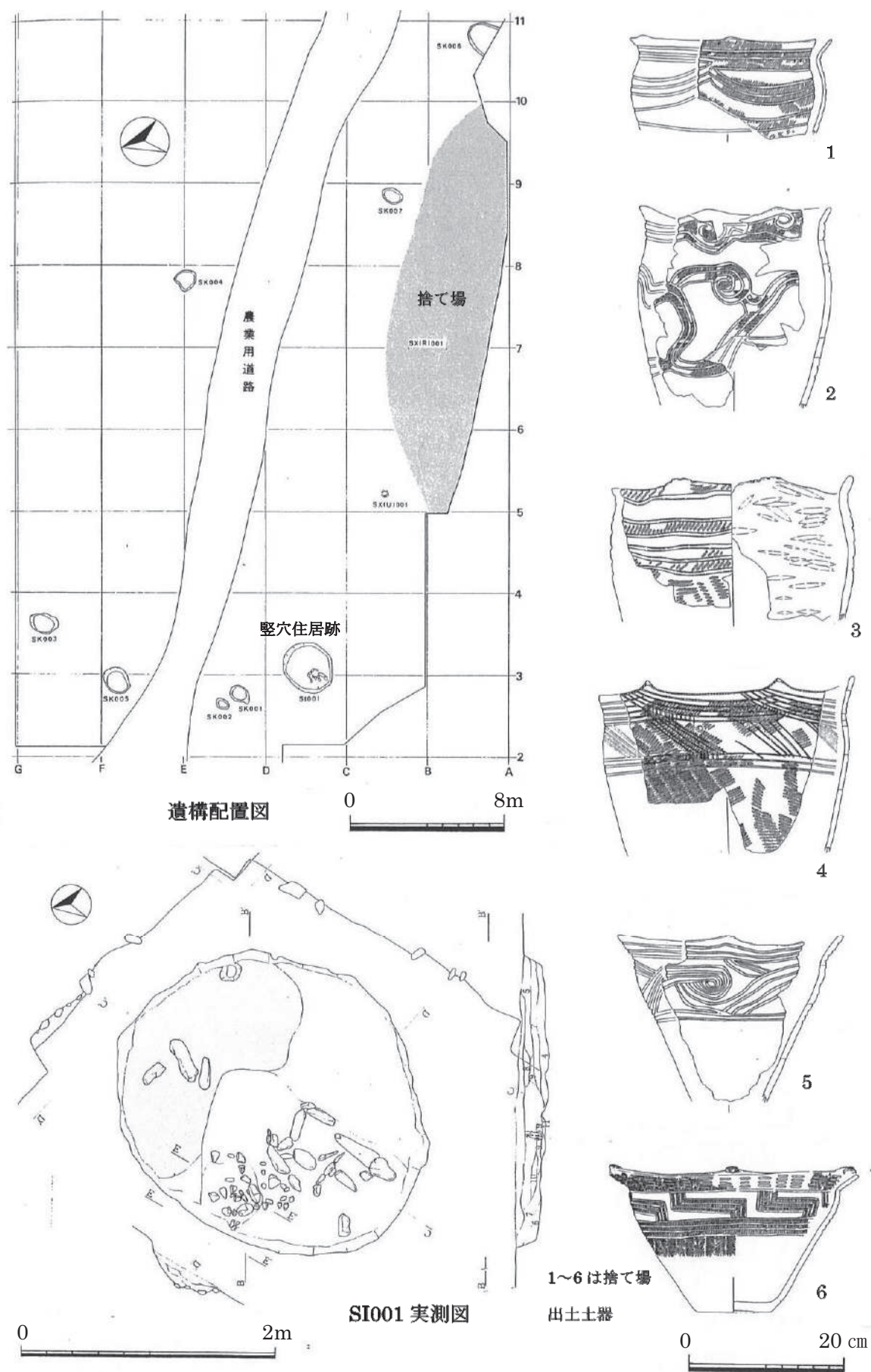
第 17 図 高屋館跡(環状列石)

鹿角郡小坂町では、日時計状組石をもつ配石遺構群が検出され『小坂環状列石墳墓』として報告書(文献 14)が刊行されている。馬の背台地上に 5 基の配石遺構がほぼ直線状に並ぶ。1 号組石と呼ばれるものが日時計状を呈し、配石下から土坑は検出されなかった。この組石の北東側 1m の地点からフラスコ状土坑が発見されている。造営時期を後期前葉としているが 4 号組石区の第 3 号ピットから後期中葉、無文で大きな装飾突起をもつ台付土器が出土した。

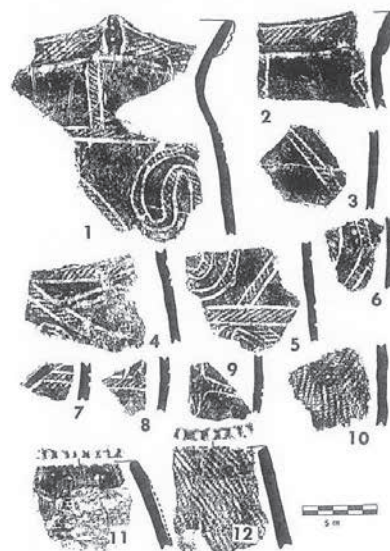
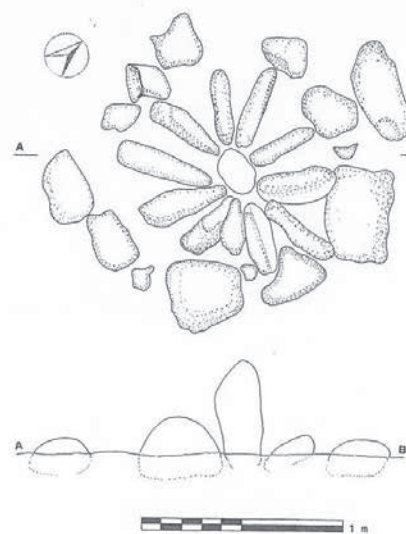
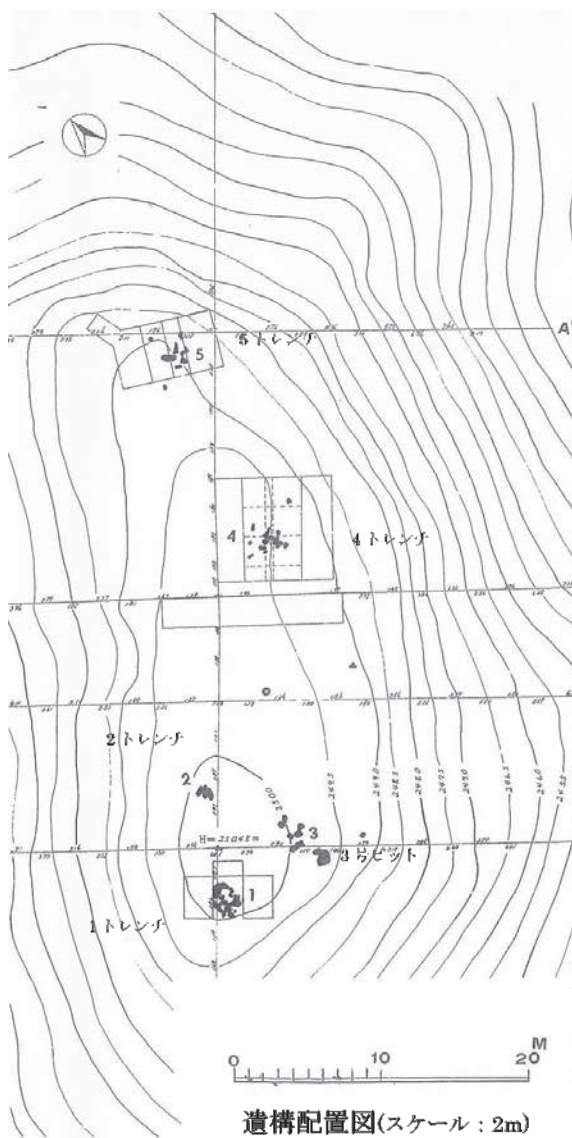
中葉に位置づけられる遺跡は、平成 9(1997)年に鹿角市花輪スキー場を会場に行われた冬季国体施設整備に関連して発掘調査された赤坂 A 遺跡がある。竪穴住居跡 6 棟が検出されたほか、T 字形を呈し、無文研磨された土偶が 2 点出土した。



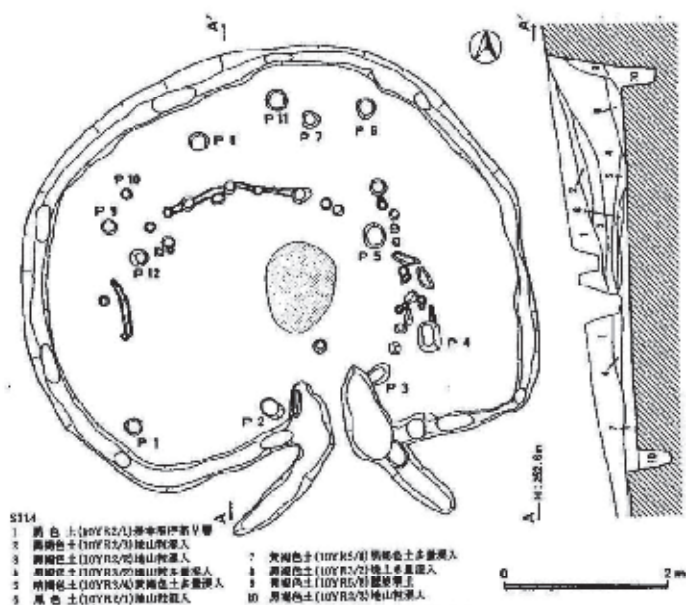
第 18 図 高屋館跡遺構外出土土器



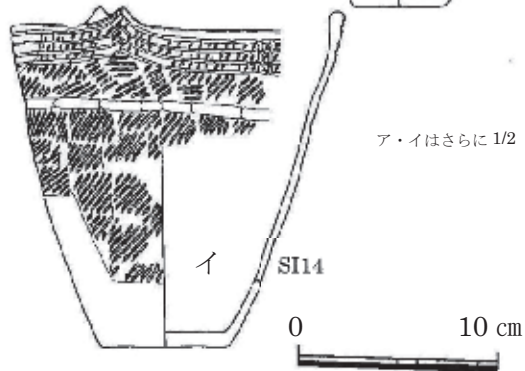
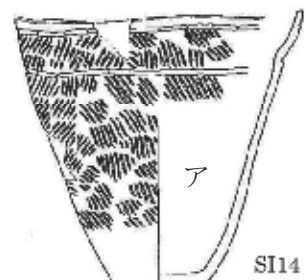
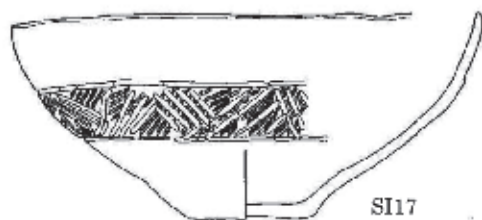
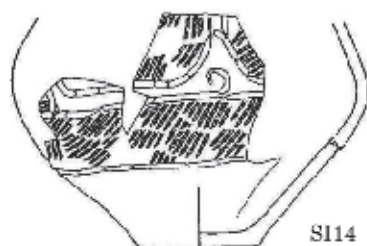
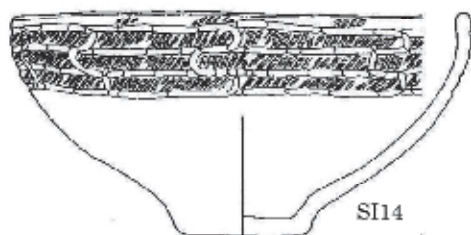
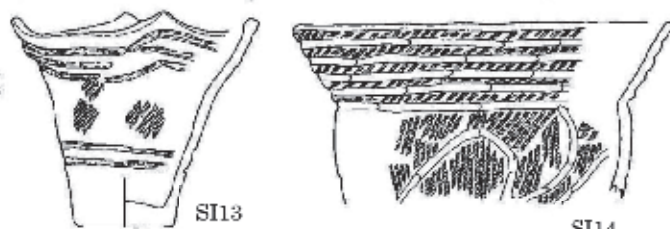
第 19 図 居熊井遺跡遺構配置図、竪穴住居跡、捨て場出土土器



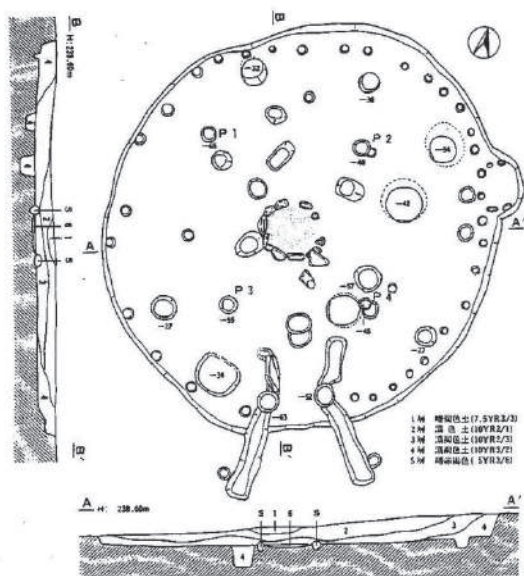
第 20 図 小坂環状列石と第 3 号ピット出土土器



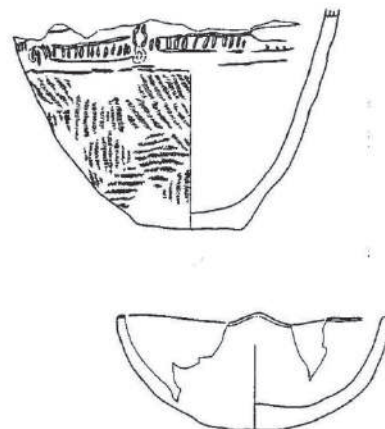
SI14実測図



第21図 赤坂A遺跡観穴住居跡実測図と出土土器



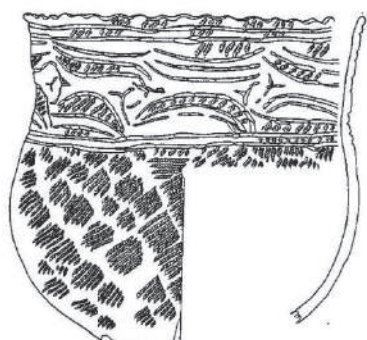
SI103 実測図



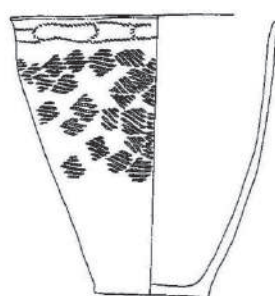
SI103 出土土器

0 5 cm

0 4m



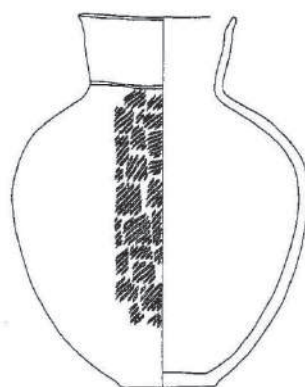
SK(F)143



SK(F)115



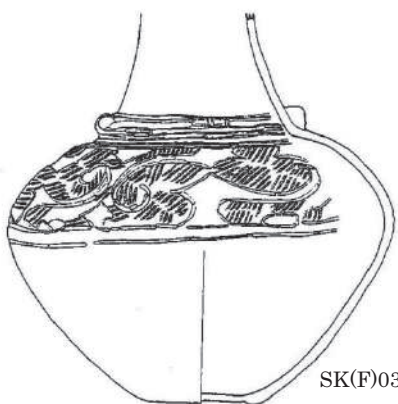
SK(F)127



SK(F)127



SK(F)131

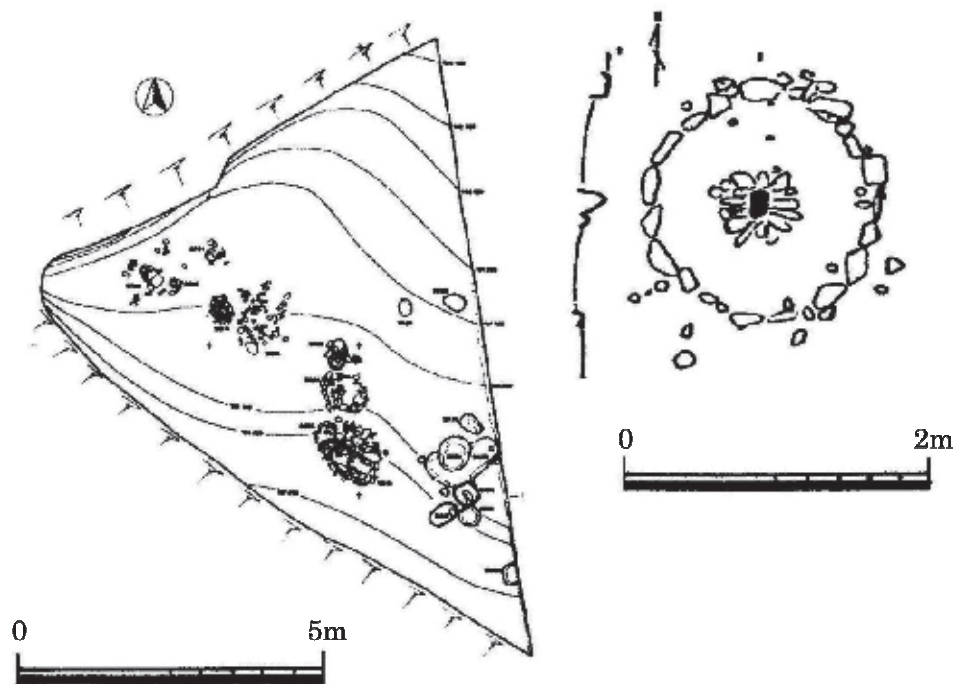


SK(F)03

0 20 cm

フラスコ状土坑出土土器

第 22 図 赤坂 B 遺跡竪穴住居跡と遺構内出土土器



第 23 図 玉内遺跡遺構配置図と日時計状組石

大湯環状列石近郊では、豊真木沢川を挟んで位置する草木A遺跡がある。昭和 49 (1974) 年、平成 18(2006)年の詳細分布調査では石囲炉が確認され、集落としての可能性を持っている。

<晩期>

後期中葉から後葉にかけて遺跡は減少し、晩期に至っては前期や中期とほぼ同範囲に遺跡が分布(第 8 図)するようになる。

代表的な遺跡として玉内遺跡、東在家遺跡がある。2つの遺跡は米代川を挟み約 500mの距離で対峙している。玉内遺跡(第 23 図)は、昭和 43(1968)年に阿部義平(文献 12)が報告している。その後、昭和 62(1987)年、国道改良工事に先立って秋田県埋蔵文化財センターが調査を行ない配石墓 4 基、土坑墓 11 基、土器棺墓 7 基のほか晩期前葉の土器が出土した。なお、阿部によって報告された配石遺構(日時計状組石)は、現在も民家の庭に保存されている。

東在家遺跡は、東北縦貫自動車道路のルート選定時に実施した分布調査で秋田県立十和田高等学校社会科同好会が試掘調査を行っている。竪穴住居跡 2 棟と復元土器 28 点が出土した。遺跡が所在する土地の所有者も耕作時に出土した土器や石器を保管しており、その一部は市指定文化財(考古)となっている。

また、平成 9 年の冬季国体の開催に合わせ、花輪スキー場周辺の整備が進められた。同年 4 年、赤坂 B 遺跡(第 22 図)が調査され、後期集落とともに晩期後葉の竪穴住居跡 1 棟が検出された。住居跡平面形は円形を呈し、南側に出入口状の施設を持ち、東側に飛び出した祭壇的な要素を持った特殊な形態を呈している。

さらに毛馬内地区に所在する柏崎館跡では晩期末から弥生にかけての土器とともに、竪穴住居跡 1 棟が検出された。